

撰時抄 せんじしやう

釈子 日蓮述

それ仏法を学がくせん法は必ず先まづ時をならうべし。過去の大通智勝だいつうちしやうぶつ仏は、出世し給ひて  
十小劫じっしやうくわうが間、一經も説き給はず。經に云く、「一坐十小劫」と。また云く、「仏、  
時のいまだ至らざるを知ろしめし、請しやうを受くるも默然もくねんとして坐す」等と云云。今の  
教主釈尊きやうしゆけんは四十余年の程、法華經を説き給はず。經に云く、「説くべき時いまだ至ら  
ざるが故に」と云云。老子は母の胎たいに処しよして八十年。弥勒菩薩みろくぼさつは兜率とそつの内院に籠こもらせ  
給ひて、五十六億七千万歳をまち給うべし。彼の時か 鳥ほとぎすは春ををくり、鷄にわとり鳥は暁をまつ。  
畜生すらなをかくのごとし。いかにいわんや、仏法を修行せんたださに時を糾たださざるべしや。  
寂滅道場の砌みぎりには十方じつぱうの諸仏示現しよぶつじげんし、一切の大菩薩集會しゆうえし給ひ、梵ぼん・帝たい・四天  
は衣ころもをひるがへし、竜神りゆうじん・八部はちぶは掌たなこころを合せ、凡夫大根性ぼんぶだいこんじやうの者は耳をそばだて、  
生身得忍しやうしんとくにんの諸菩薩しよぼさつ、解脱月等げだつがつ、請しやうをなし給ひしかども、世尊せそんは二乗作仏にじやうさぶつ・久遠実

成じやうをば名字みやうじをかくし、即身成仏そくしんじやうぶつ・一念三千いちねんさんぜんの肝心かんじん、その義のを宣給のはず。これらは

偏ひとえにこれ機きはありしかども、時の来きたらざればのべさせ給はず。経に云く、「説くべき時  
いまだ至らざるが故に」等と云云。

靈山りやうぜんえじやう会上みぎりの砌えんぶには閻浮第一えんぶの不孝の人たりし阿闍世大王座あじやせにつらなり、一代いちだい謗法ぼうぼう

の提婆達多だいばだつたには天王如来てんのうにょらいと名をさづけ、五障ごしやうの竜女りゆうにょは蛇身じやしんをあらためずして仏にな

る。決定けつじやうてい性の成仏じやうぶつは焦いれる種ねの花さき果みなり、久遠実成きうえんじつじやうは百歳ひゃくさいの翁おきな二十五の子とな

れるかとうたがふ。一念三千くかいそくぶつかいは九界即仏界くかいそくぶつかい、仏界即九界ぶつがいと談ず。さればこの経の一字は

如意宝珠にょいほうじゆなり。一句は諸仏しゆぶつの種子しゆじとなる。これらは機きの熟じゆく・不熟ふじゆくはさてをきぬ、時の

至れるゆへなり。「経に云く、「今正いましく是これ其その時なり、決定けつじして大乘を説かん」等と  
云云。

問うて云く、機にあらざるに大法を授けられば、愚人ぐにんは定めて誹謗をなして惡道あくだうに墮おつ  
るならば、あに説く者の罪にあらずや。

答へて云く、人路をつくる。路に迷ふ者あり。作る者の罪となるべしや。良<sup>りよう</sup>医<sup>い</sup>藥を病人にあたう。病人嫌いて服せずして死せば、良<sup>とが</sup>医<sup>い</sup>の失となるか。

尋<sup>たず</sup>ねて云く、法華經の第二に云く、「無智の人の中にこの經を説くことなかれ」。同じき第四に云く、「分布<sup>ぶんぷ</sup>して妄<sup>みだ</sup>りに人に授与すべからず」。同じき第五に云く、「この法華經は諸仏如来の秘密の藏なり。諸經の中において最もその上<sup>かみ</sup>にあり、長夜<sup>じやうや</sup>に守護して妄<sup>みだ</sup>りに宣<sup>せん</sup>説せざれ」等と云云。これらの經文は機にあらずば説かざれといつか、い<sup>かん</sup>。

今反詰<sup>ほんきつ</sup>して云く、「不<sup>ふ</sup>輕<sup>きやう</sup>品に云く、「しかもこの言<sup>ことば</sup>をなさく、我れ深く汝等を敬<sup>うやま</sup>う」等と云云。「四衆<sup>ししゆ</sup>の中に瞋<sup>しんに</sup>恚を生じ、心不淨なる者あり。惡口罵詈<sup>あつくめり</sup>して言<sup>いわ</sup>く、この無智<sup>むち</sup>の比丘<sup>びく</sup>」と。また云く、「衆人<sup>しゆつにん</sup>或は杖木瓦石をもつてこれを打擲<sup>ちやうちやく</sup>す」等と云云。勸持品に云く、「諸<sup>もろもろ</sup>の無智の人の惡口罵詈<sup>あつくめり</sup>等し、及び刀杖<sup>とうじやう</sup>を加うる者あらん」と云云。これらの經文は、惡口罵詈<sup>ないし</sup>乃至打擲すれどもととかれて候は、説く人の失<sup>とが</sup>となりけ

るか。

求めて云く、この両説は水火なり。すいか いかんが心うべき。

答へて云く、てんだい「天台云く、「時に適うのみ」。かな 章安云く、しやうあん「取捨宜きを得て一向にすべ

からず」等と云云。釈の心は、あるとき或時は謗じぬべきにはしばらくとかず。ほう或時は謗ずと

も強ひて説くべし。し或時は一機は信ずべくとも万機謗ずべくばとくべからず。いつき或時は万

機一同に謗ずとも強て説くべし。しよじやうだう初成道の時は法慧・功德林・金剛幢・金剛蔵・

文殊・普賢・弥勒・解脱月等の大菩薩、もんじゆ ふげん みろく げだつがつ梵・帝・四天等の凡夫大根性の者かずをし

らず。ろくやあん その鹿野苑の苑には、俱隣等の五人、迦葉等の二百五十人、舍利弗等の二百五十人、

八万の諸天。ほうどつだいえ方等大会の儀式には、世尊の慈父の淨飯大王もねんごろに恋せさせ給ひ

しかば、ほとけ みや仏、宮に入らせ給ひて觀仏三昧経を説かせ給ひ、かんぶつさんまい悲母の御ために忉利天に九

十日が間籠らせ給ひしには、こも摩耶経をとかせ給ふ。まやきやう慈父悲母などにはいかなる秘法か

惜しませ給ふべき。なれども法華経をば説かせ給はず。せんずるところ、機にはよらず、

時いたらざれば、いかにもとかせ給はぬにや。

問うて云く、何なる時にかいか小乗・権經しよつじよつ こんきよつをとき、何なる時にか法華經を説くべきや。

答へて云く、十信じっしんの菩薩より等覺とうかくの大士だいじにいたるまで、時ときと機きとをば相知りあいがたき事なり。いかにいわんや、我等われらは凡夫なり。いかでか時機じきをしるべき。

求めて云く、すこしも知る事あるべからざるか。

答えて云く、仏眼をかつて時機をかんがへよ。仏も日を用て国をてらせ。

問うて云く、その心いかん如何。

答えて云く、大集經だいしつきよつに大覺世尊だいがくせそん、月藏菩薩がつぞうに対して未來の時を定め給えり。いわゆる、

我が滅度の後ののち五百歳の中には解脫堅固げだつけんこ、次の五百年には禪定堅固ぜんじよつ 已上二千年、次

の五百年には読誦多聞堅固どんじゆたもんけんこ、次の五百年には多造塔寺堅固たぞうとうじけんこ 已上二千年、次の五百年

には「我が法の中において鬪諍言訟とうじようごんじようして白法隱没びやくほうおんもつせん」等と云云。

この五の五百歳、二千五百余年に人々の料簡りようけんさまざまなり。漢土かんどの道綽どうしやく禪師ぜんじが云く、

正・像二千、四箇の五百歳には小乗と大乘との白法盛なるべし。末法に入つては彼等の白法皆な消滅して、浄土の法門・念仏の白法を修行せん人計り生死をはなるべし。日本国の法然が料簡して云く、今日本國に流布する法華經・華嚴經並に大日經・諸の小乗經、天台・真言・律等の諸宗は、大集經の記文の正・像二千年の白法なり。末法に入つては彼等の白法は皆滅尽すべし。たとい行ずる人ありとも一人も生死をはなるべからず。十住毘婆沙論と曇鸞法師が難行道、道綽の「未有一人得者」、善導の「千中無一」これなり。彼等の白法隱没の次には浄土三部經・弥陀称名の一行計り大白法として出現すべし。これを行ぜん人々はいかなる悪人・愚人なりとも「十即十生、百即百生」、「ただ浄土の一門のみあつて通入すべき路」とはこれなり。されば後世を願はん人々は、叡山・東寺・園城・七大寺等の日本一州の諸寺・諸山の御帰依をとどめて、彼の寺山によせをける田畠郡郷をうばいと（取）て念仏堂につけば、決定往生、南無阿弥陀仏とすゝめければ、我朝一同にその義になりて

今に五十余年なり。日蓮これらの悪義を難じやぶる事は事ふり候ぬ。

かの大集經だいしつきようの白法隱没びやくほうおんもつの時は、第五の五百歳ごうせい当世なる事は疑ひなし。ただし彼の白

法隱没の次には、法華經の肝心たる南無妙法蓮華經の大白法の、一閻浮提いちえんぶだいの内八万の国

あり、その国々に八万の王あり、王々しんかごとに臣下並に万民までも、今日いま日本国に弥陀称名みだしようみよう

を四衆ししゆの口々に唱ふるがごとく、広宣流布こうせんるふせさせ給ふべきなり。

問うて云くいわ、その証文いかん如何。

答へて云く、法華經の第七に云く、「我が滅度わの後のち、後の五百歳の中に、閻浮提えんぶだいに広宣

流布して、断絶せしむることなけん」と云云。經文は、大集經だいしつきようの白法隱没の次の時

をとかせ給ふに「広宣流布」と云云。同じき第六の巻に云く、「惡世末法あくせまつぽうの時、能くこ

の經たまを持つ者」と等と云云。また第五の巻に云く、「後の末世のちまつせの法滅せんと欲する時に

おいて」と等と。また第四の巻に云く、「しかも此の經は如来の現在にすら猶怨嫉なのおおんしつ多し。況

んや滅度のちの後をや」と。また第五の巻に云く、「一切世間あだ怨多あだくして信じ難し」と。

また第七の巻に第五の五百歳闘諍堅固の時を説いて云く、「悪魔・魔民・諸の天・

りゆう

竜・夜叉・鳩槃荼等、その便を得ん」と。大集経に云く、「我が法の中において

とうじょう

闘諍言訟せん」と云云。法華経の第五に云く、「悪世の中の比丘」と。また云く、

「或は阿蘭若にあり」と等と云云。また云く、「悪鬼その身に入る」と等と云云。文の

あらんにや

心は、第五の五百歳の時、悪鬼の身に入れる大僧等国中に充滿せん。その時に智人一人

出現せん。彼の悪鬼の入れる大僧等、時の王臣・万民等を語らひて、悪口罵詈、杖木瓦

礫、流罪死罪に行はん時、釈迦・多宝・十方の諸仏、地涌の大菩薩らに仰せつけば、

大菩薩は梵・帝・日月・四天等に申しくだされ、その時天変地天盛なるべし。国主等

そのいさめを用ひずば、隣国にをほせつけて、彼々の国々の悪王・悪比丘等をせめらる

るならば、前代未聞の大闘諍一閻浮提に起るべし。その時日月所照の四天下の一切

衆生、或は国ををしみ、或は身ををしむゆへに、一切の仏・菩薩にいのり（祈）をか

くともしるし（験）なくば、彼のにくみ（憎）つる一の小僧を信じて、無量の大僧等

か

彼にくみ（憎）つる一の小僧を信じて、無量の大僧等

・八万の大王等・一切の万民、皆頭こつへを地につけ、掌たなこころを合せて、一同に南無妙法蓮華經となうべし。例せば、神力品じんりきほんの十神力の時じゅうじんりき、十方世界じつぽうせかいの一切衆生いっさいしゅじょういちにん一人もなく、娑婆世界しゃばに向つて大音声だいおんじようをはなちて、南無釈迦牟尼仏なむしやくかむにぶつ／＼、南無妙法蓮華經／＼と一同にさけびしがごとし。

問いうて曰いわく、經文ふんみようは分明ぶんめいに候。天台・妙樂・伝教等の未来記みらいきの言ことばはありや。

答こたへて云く、汝が不審さかさま逆さかさまなり。釈を引かん時こそ經論はいかにとは不審せられたれ。

經文に分明ぶんめいならば釈を尋ぬべからず。さて釈の文もん、經に相違せば經をすてて釈につくべきか、如何いかん。

彼かれの云く、道理至極しごくせり。しかれども凡夫ぼんぶの習ならひ、經は遠し釈は近し。近き釈分明ならば、いますこし信心をますべし。

今云く、汝が不審ねんごろなれば少々釈をいだすべし。「天台大師云く、後ののち五百歳、遠く妙道みょうだうに沾つわん」と。「妙樂大師云く、「末法まつぽうの初め、冥利みょうりなきにあらず」と。「伝

教大師云く、「正しやうぞう像ぞう稍おほ過ぎ已やりて、末法はなは太おほだ近まきに有あり、法華ま一乗さの機こ、今いま正ただしくは  
 れ其その時ときなり。何なにをもつて知しることを得える。安樂あんらく行ぎやう品ひんに云く、末世あんらくぎやう法滅はつめつの時ときなり」と。  
 また云く、「代よを語かたれば則すなはち像ぞうの終まつり末まつの初はつめ、地ちを尋たづぬれば唐かうの東とう羯かくの西せい、人たすを原はらぬ  
 れば則すなはち五濁ごじよくの生しやう鬪とう争じやうの時ときなり。經きやうに云く、猶多ゆた怨おん嫉しつ況きやう滅めつ度ど後ごと。この言こと良よし  
 に以ゆあるなり」と云いふ。  
 それ釈尊じやくそんの出世しゅつせは住じゆ劫くわく第九だいじゅうの滅めつ、人にん寿じゆ百歳ひゃくさいの時ときなり。百歳ひゃくさいと十歳じゅうさいの中ちゆう間かん、在世ざい五ご十  
 年ねん、滅後めつご二千年にせんと一万年いちまんねんとなり。その中ちゆう間かんに法華はふわ經きやう流布りゆうふの時とき二に度どあるべし。いわゆる在世ざい  
 の八年はつねん、滅後めつごには末法まふはふの始はつめの五百年ごひゃくねんなり。しかるに天台たいたい・妙樂めうがく・伝教でんきやう等はらすす(進)で  
 は在世ざい法華はふわの御時おんときにももれさせ給たまひぬ。退しりぞひては滅後めつご末法まふはふの時ときにも生なれさせ給たまはず。  
 中ちゆう間かんなる事ことをなげかせ給たまひて、末法まふはふの始はつをこひ(恋)させ給たまふ御筆ごふでなり。例れいせば、阿私あし陀だ  
 仙人しやうじんが悉達しつたたい太子たいしの生なれさせ給たまひしを見て悲かなんで云く、現生げんしやうには九十くじゅうにあまれり。太子たいし  
 の成道じやうどうを見るべからず。後生ごしやうには無色界むしきかいに生なれて五十年ごじゅうねんの説法しふぽうの坐ざにもつらなるべか

らず。正・像・末にも生るべからず、となげきしがごとし。道心あらん人々はこれを見

きゝて悦ばせ給へ。正・像二千年の大王よりも、後世ををもはん人々は、末法の今の民

にてこそあるべけれ。これを信ぜざらんや。彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華經と唱

る癡人とはなるべし。梁の武帝の願に云く、寧ろ提婆達多となて無間地獄には沈む

とも、鬱頭羅弗とはならじと云云。

問うて云く、竜樹・天親等の論師の中にこの義ありや。

答へて云く、竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給ふとはいえども、言にはこの義を宣

べ給はず。

求めて云く、いかなる故にか宣べ給はざるや。

答へて云く、多くの故あり。一には彼の時には機なし。二には時なし。三には迹化なれ

ば付嘱せられ給はず。

求めて云く、願くはこの事よく／＼きかんとをもつ。

答へて云く、それ仏の滅後二月十六日よりは正法の始なり。はじめ迦葉尊者かしようそんじやほとけの付嘱をうけて二十年、次に阿難尊者二十年、次にあなん商那和修二十年、次にしょうなわしゆ優婆崛多二十年、次にうぱくつた提多迦二十年、已上一百年が間は、ただ小乗經の法門をのみ弘通して、諸大乘經は名字なづもなし。いかにいわんや法華經をひろむべしや。次にはみしやか弥遮迦・ぶつだなんだい仏陀難提・ぶつだみつた仏駄蜜多・きようびく脇比丘・ふなしや富那奢等の四、五人、前の五百余年が間は大乘經の法門少々出来せしかども、とりたてゝ弘通し給はず、ただ小乗經を面としてやみぬ。已上大乘經の先の五百年、げだつけんこ解脱堅固の時なり。

正法の後六百年已後一千年が前、その中間にめみよう馬鳴菩薩・びらそんじや毘羅尊者・りゆうじゆ竜樹菩薩・だいは提婆菩薩・らご羅睺尊者・そうぎやなんだい僧伽難提・そうぎややしや僧伽耶奢・くまらだ鳩摩羅駄・じゃやな閼夜那・ばんだ盤陀・まぬら摩奴羅・かくろくやな鶴勒夜那・しし師子等の十余人の人々、始には外道の家に入り、次には小乗經をきわめ、後には諸大乘經をもて諸小乗經をさんぐに破し失ひ給ひき。これらの大士等は、諸大乘經をもつて諸小乗經をば破せさせ給ひしかども、諸大乘經と法華經の勝劣をば分明にかゝせ給はず。

たとひ勝劣をすこしかゝせ給ひたるやうなれども、本迹ほんじやくの十妙・二乗にじようさぶつ作仏・久遠実

成・已今当の妙・百界千如・一念三千の肝要の法門は分明ならず。ただ或は指をも

つて月をさすがごとくし、或は文もんにあたりてひとし（一端）計りばかかゝせ給ひて、化道けどう

の始終・師弟の遠近・得道の有無はすべて一分もみへず。これらは正法の後の五百

年、大集經の禅定堅固の時にあたれり。

正法一千年の後は、月氏がつしに仏法充滿せしかども、或は小をもて大を破し、或は權經ごんきようを

もつて実經を隱没おんもつし、仏法さまゞに乱れしかば、得道の人やうやくすくなく、仏法に

つけて惡道に墮おつる者かずをしらず。

正法一千年の後、像法に入つて一十五年と申せしに、仏法東に流れて漢土かんとに入りనికి。

像法の前五百年の内、始の一百余年が間は、漢土の道士どうしと月氏の仏法と諍論じようろんしていま

だ事さだまらず。たとひ定まりたりしかども、仏法を信ずる人の心いまだふかからず。し

かるに仏法の中に大小・權実・顯密をわかつならば、聖教しよきよう一同ならざる故、疑うたがをこ

りて、かへりて外典げてんとともな(伴)う者もありぬべし。これらのをそれあるがゆへに、摩騰まとつ  
じくらん竺蘭みずかは自らは知つてしかも大小を分けず、権実をいはずしてやみぬ。その後、魏ぎ・晋しん  
そう・宋せい・齊りよう・梁の五代が間、仏法の内に大小・権実・顯密をあらそひし程に、いづれこ  
 そ道理ともきこえずして、上かみ一人いちじんより下も万民ばんみんにいたるまで不審ふしんすくなくらず。  
なんさんほくしち南三北七と申して仏法じふうりやう十流にわかれぬ。いわゆる南には三時じ・四時・五時、北には  
 五時・半満はんまん・四宗・五宗・六宗・二宗の大乗いつとん・一音等、各々義を立ておのておののおの執へんしゆう水火なり。  
 しかれども大綱たいこうは一同なり。いわゆる一代いちだい聖教しやうぎやうの中には華嚴經第一、涅槃經第二、  
あこん法華經第三なり。法華經は阿含はんにや・般若じやうみやう・淨名しやく・思益等の経々に対すれば、眞実なり、  
りやうぎきやう了義經しやうけん・正見なり。しかりといえども、涅槃經に対すれば、無常むじやうぎきやう教・不了義經・  
じゃけん邪見の経等云云。

漢より四百余年の末すへ五百年に入つて、陳ちん・隋ずい二代に智顗ちぎと申す小僧しやうそう一人にんあり。後には天台智者大師と号したてまつる。南北の邪義をやぶりて、一代聖教の中には法華經第

一、涅槃經第二、華嚴經は第三なり等と云云。これ像法の前五百歳、大集經の読誦多聞堅固の時にあひあたれり。

像法の後の五百歳は、唐の始太宗皇帝の御宇に、玄奘三蔵月支に入つて十九年が間、

百三十ヶ国の寺塔を見聞して、多くの論師に値ひたてまつりて、八万聖教・十二部經

の淵底を習ひきわめしに、その中に二宗あり。いわゆる法相宗・三論宗なり。この二宗

の中に法相大乘は、遠くは弥勒・無著、近くは戒賢論師に伝へて、漢土にかへりて太

宗皇帝にさづけさせ給ふ。この宗の心は、仏教は機に随ふべし。一乗の機のためには三乗

方便一乘真實なり。いわゆる法華經等なり。三乗の機のためには三乘真實一乘方便。いわ

ゆる深密經・勝鬘經等これなり。天台智者等はこの旨を弁へず等と云云。しかも太宗

は賢王なり。當時名を一天にひびかすのみならず、三皇にもこえ五帝にも勝れたるよし

四海にひびき、漢土を手ににぎるのみならず、高昌・高麗等の一千八百余国をなびか

し、内外を極めたる王ときこえし賢王の第一の御帰依の僧なり。天台宗の学者の中にも

頸をさしいだす人一人もなし。しかれば法華經の実義すでに一国に隠没しぬ。

同じき太宗の太子高宗、高宗の繼母則天皇后の御宇に法蔵法師と云ふ者あり。法相宗

に天台宗のをそ（襲）わるるところを見て、前に天台の御時せめられし華嚴經を取り出

して、一代の中には華嚴第一、法華第二、涅槃第三と立てけり。太宗第四代玄宗皇帝の

御宇、開元四年と同八年に、西天印度より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵、大日

經・金剛頂經・蘇悉地經を持て渡り、真言宗を立つ。この宗の立義に云く、教に二

種あり。一には釈迦の顕教、いわゆる華嚴・法華等。二には大日の密教、いわゆる大日經

等なり。法華經は顕教の第一なり。この經は大日の密教に対すれば、極理は少し同じけ

れども、事相の印契と真言とはたえてみへず。三密相応せざれば不了義經等と云云。

已上法相・華嚴・真言の三宗一同に天台法華宗をやぶれども、天台大師程の智人、法華

宗の中になかりけるかの間、内々はゆはれなき由は存じけれども、天台のごとく公場

にして論ぜられざりければ、上国王・大臣、下一切の人民にいたるまで、皆仏法に迷ひ

て、衆生しゆじやうの得道とくどうみなとどまりけり。これらは像法のちの後の五百年の前二百余年が内なり。

像法に入つて四百余年と申しけるに、百済国くだらこくより一切経並に教主釈尊もくそつの木像そくに・僧尼等日

本国にわたる。漢土かうどの梁りやうの末、陳ちんの始にあひあたる。日本には神武天王じんむてんのうよりは第三十

代、欽明きんめい天王ぎやうの御宇なり。欽明きんめいの御子用明みこようめいの太子じやうていに上宮王子、仏法を弘通し給ふのみ

ならず、並に法華經・淨名經じやうみやう・勝鬘經しやうまんを鎮護国家ちんここつかの法と定めさせ給いぬ。

その後人王第三十七代に孝徳天皇かうとくの御宇に、三論宗じやうろん・成実宗かんろくそつじやうを觀勒僧正くわくしやう百済国より

わたす。同じき御代みよに道昭どうしやう法師漢土より法相宗ほつそう・俱舍宗くしゃをわたす。人王第四十四代元

正しやう天王の御宇に、天竺てんじくより大日經をわたしてありしかども、しかも弘通せずして漢土

へかへる。この僧をば善無畏三蔵ぜんむいという。人王第四十五代に聖武天皇しやうむの御宇に、審祥しんじやう

大徳しひぎ、新羅国しんらこくより華嚴宗をわたして、良弁僧正りやうべん・聖武天王にさづけたてまつりて、東大

寺の大仏を立てさせ給えり。同じき御代に大唐がんとんの鑑真和尚わじやう、天台宗と律宗をわたす。

その中に律宗をば弘通し、小乗こじやうの戒場かいじやうを東大寺に建立こんりゆうせしかども、法華宗の事をば

名字みょうじをも申し出させ給はずして入滅あつめつしたんぬ。

その後人王のち第五十代、像法八百年に相当あいあたつて桓武天皇かんむの御宇ぎように、最澄さいちようと申す小僧しやうそう出来しゅつたいせり。後のちには伝教でんぎやう大師と号したてまつる。始には三論・法相・華嚴・俱舍・成実

・律の六宗並に禅宗等を行表ぎやうひやう僧正等に習学せさせ給ひし程に、我われと立て給へる国昌こくしやう寺、後には比叡山ひえいざんと号す。ここにして六宗の本經・本論と宗々の人師にんしの釈しやくとを引合せて

御らむありしかば、彼の宗々の人師かの釈しやく、所依しよえの經論に相違せる事多き上、僻見びやくけん多々

にして、信受せん人皆惡道に墮おちぬべしとかんがへさせ給ふ。その上法華經の実義は、宗々の人々われえ我も得たり／＼と自讃ありしかども、その義なし。これを申すならば喧嘩けんかしゆつたい出来

すべし。もだ(默)して申さずば仏誓ぶつせいにそむきなんと、をもひわづらわせ給ひしかども、終つひに仏の誠いましめををそれて、桓武皇帝に奏し給ひしかば、帝みかどこの事ををどろかせ給ひて、

六宗の碩学せきがくに召し合させ給ふ。彼の学者等、始は慢幢山まんどうやまのごとし、惡心毒蛇あくしんどくじやのやうなりしかども、終に王の前にしてせめをとされ、六宗七寺一同に御弟子みでしとなりぬ。例せば、

漢土の南北の諸師、陳ちんでん殿にして天台大師にせめをとされて御弟子となりしがごとし。こ  
 れはこれ円えんじよう定・円えん慧計りなり。その上、天台大師のいまだせめ給はざりし小乗の別受戒べつじゆかい  
 をせめをとし、六宗の八大徳に梵網ぼんもつぎやう經の大乗別受戒をさづけ給ふのみならず、法華經  
 の円えん頓どんの別受戒を叡山こんりゆうに建立せしかば、延曆えんりやく円えん頓どんの別受戒は日本第一たるのみなら  
 ず、仏の滅後一千八百余年が間、身毒けんどく・尸し那な・一閭いちえん浮提ぶだいにいまだなかりし靈山りようぜんの大戒  
 日本国に始る。されば伝教大師は、その功こうを論ずれば、竜樹りゆうじゆ・天親てんじんにもこえ、天台・  
 妙楽みょうらくにも勝すぐれてをはします聖人しやうにんなり。されば日本国の当世とうせいの東寺・園城おんじやう・七大寺、  
 諸国の八宗・浄土・禅宗・律宗等の諸僧等、誰人たれひとか伝教大師の円戒をそむくべき。かの  
 漢土九国の諸僧等は、円定・円慧は天台の弟子ににたれども、円頓えんどん一同の戒場は漢土に  
 なければ、戒けいをいては弟子とならぬ者もありけん。この日本国は伝教大師の御弟子みでしにあ  
 らざる者は外道げどうなり、悪人なり。しかれども漢土・日本の天台宗と真言の勝劣は、大師  
 心中しんちゆうには存知ぞんちせさせ給ひけれども、六宗と天台宗とのごとく公場にして勝負なかりけ

るゆへにや、伝教大師已後には東寺・七寺・園城おんじょうの諸寺、日本一州一同に、真言宗は天台宗に勝すぐれたりと上かみ一人より下万人にいたるまでをばしめしをえり。しかれば天台法華宗は伝教大師の御時計りにぞありける。この伝教の御時は像法の末すえ、大集經だいしつきようの多た造塔寺堅固の時なり。いまだ「我が法の中において鬭諍言訟とうじようこんじようして白法隱没びやくほうおんもつせん」の時にはあたらず。

今末法に入つて二百余歳、大集經だいしつきようの「於我法中鬭諍言訟白法隱没」の時にあたり。仏語ぶつごまことならば定んで一閻浮提いちえんぶだいに鬭諍起るべき時節なり。伝へ聞く、漢土は三百六十箇国二百六十余州はすでに蒙古国に打やぶられぬ。花洛からくすでにやぶられて、徽宗きそう・欽宗きんそうの両帝、北蕃ほくばんにいけどりにせられて、韃靼だたんにして終にかくれさせ給ひぬ。徽宗の孫、高宗皇帝こうそうは長安ちやうあんをせめをとされて、田舎りんあんあんざいふの臨安行在府に落ちさせ給ひて、今に数年が間京みやこをみず。高麗こうらい六百余国も新羅しらぎ・百濟等の諸国等も、皆皆大蒙古国の皇帝にせめられぬ。今の日本国の壹岐いぎ・対馬並に九国のごとし。鬭諍堅固の仏語地に墮おちず。あ

たかもこれ、大海のしをの時をたがへざるがごとし。

これをもつて案ずるに、大集經の白法隱没の時に次で、法華經の大だい白びやく法ぽうの日本国並に

一閻浮提にいつせんるふ広宣流布せん事も疑うべからざるか。彼かの大集經は仏説の中のこんだいじよう權大乘ごんたいじようぞか

し。生死をはなるゝ道には、法華經の結縁けちえんなき者のためには未顕眞実なれども、六道ろくどう・

四生ししよう・三世の事を記し給ひけるは寸分もたがわざりけるにや。いかにいわんや、法華

經は釈尊は「要よう當とう說せつ眞實しんじつ」となのらせ給ひ、多宝たぼう仏は眞実なりと御判ごはんをそへ、十方じつぽうの

諸しよ仏は広長こうちよう舌ぜつを梵天ぼんでんにつけて誠諦じようたいと指さし示し、釈尊は重ねて無虚妄むこもつの舌しきくを色究竟ききよう

に付けさせ給ひて、後五百歳ごこひやくさいに一切の仏法の滅せん時、上行菩薩じようぎように妙法蓮華經の五

字をもたしめて、謗法一闍提ほうほういつせんたいの白癩病びやくらいびようの輩ともがらの良藥りうやくとせんと、梵・帝・日・月・

四天・竜神等に仰せつけられし金言きんげん、虚妄なるべしや。大地は反覆はんぷくすとも、高山こうざんは頽落たいらく

すとも、春の後に夏きたは来らずとも、日は東へかへるとも、月は地に落おつるとも、この事ことは

一定いちじようなるべし。

この事一定ならば、鬭<sup>と</sup>諍<sup>う</sup>堅固<sup>けんこ</sup>の時、日本国の王臣と並に万民等が、仏の御使<sup>おんつかい</sup>として南  
 無妙法蓮華經と流布<sup>るふ</sup>せんとするを、或<sup>ある</sup>は罵詈<sup>めり</sup>し、或<sup>あつく</sup>は惡口<sup>あくぐち</sup>し、或<sup>ある</sup>は流罪<sup>るざい</sup>し、或<sup>あつく</sup>は打擲<sup>ちようちやく</sup>  
 し、弟子・眷屬<sup>けんぞく</sup>等を種々の難にあわする人々、いかでか安穩にては候べき。これをば愚痴<sup>ぐち</sup>  
 の者は咒詛<sup>じゆそ</sup>すともいぬべし。法華經をひろむる者は日本の一切衆生の父母なり。  
 章安大師云く、「彼<sup>かれ</sup>がために惡を除くは、すなわちこれ彼が親なり」等と云云。され  
 ば日蓮は当帝<sup>とうたい</sup>の父母、念佛者・禅衆・真言師等が師範なり、また主君なり。しかるを  
 上<sup>かみ</sup>一人より下<sup>しも</sup>万民<sup>ばんみん</sup>にいたるまであだをなすをば、日月いかでか彼等が頂<sup>いた</sup>を照し給ふ  
 べき。地神<sup>ちじん</sup>いかでか彼等の足を載せ給ふべき。提婆達多<sup>だいばだつた</sup>は仏を打ちたてまつりしかば、  
 大地揺動<sup>ようどう</sup>して火災<sup>かえん</sup>いでにき。檀弥羅王<sup>だんみらおう</sup>は師子尊者<sup>しそんじゃ</sup>の頭<sup>こうへ</sup>を切りしかば、右の手、刀と  
 もに落ちぬ。徽宗皇帝<sup>きそう</sup>は法道<sup>ほつだう</sup>が面<sup>かお</sup>にかなやき（火印）をやきて江南<sup>こつなん</sup>にながせしかば、半  
 年が内にえびすの手にかかり給ひき。蒙古<sup>もうこ</sup>のせめもまたかくのごとくなるべし。たとひ  
 五天のつわものをあつめて、鉄围山<sup>てつちせん</sup>を城とせりともかなうべからず。必ず日本国の一切

衆生兵難に値ふべし。  
へいなん あ

されば日蓮が法華經の行者にてあるなきかは、これにて見るべし。教主釈尊記して云く、

「末代惡世あくせに法華經を弘通くすうするものを惡口罵詈等せん人は、我を一劫われ いっけつが間あだせん者の

罪にも、百千万億倍すぎたるべし」ととかせ給へり。しかるを今の日本国の国主・万民等雅が

(我)意にまかせて、父母宿世すくせの敵かたきよりもいたくにくみ、謀反・殺害むほん せつがいの者よりもつよ

くせめぬるは、現身げんしんにも大地われて入り、天雷てんらいも身をさかざるは不審なり。日蓮が法華

經の行者にてあらざるか。もししからばをゝきになげかし。今生こんじようには万人にせめられて

片時もやすからず、後生ごしやうには惡道に墮おちん事あさましとも申すばかりなし。

また日蓮法華經の行者ならずば、いかなる者の一乗いちじやうの持者じしやにてはあるべきぞ。法然ほうねんが

法華經をなげすてよ、善導ぜんどうが「千中無一せんちゆうむいち」、道綽どうしやくが「未有一人得者みういちにんとくしや」と申すが法華

經の行者にて候べきか。また弘法大師こうぼうだいしの云く、「法華經を行ずるは戲論けろんなり」とかゝれ

たるが法華經の行者なるべきか。經文には「能持是經のうじぜきよう」「能説此經のうせつしきよう」なんどこそとか

れて候へ。よくとくと申すはいかなるぞと申すに、「於諸經 中 最在其上」と申して、

だいにちきよう

けこん

ねはん

はんによ

大日經・華嚴經・涅槃經・般若經等に法華經はすぐれて候なりと申す者をこそ、經文

には法華經の行者とはとかれて候へ。もし經文のごとくならば、日本国に仏法わたて七百

余年、伝教大師と日蓮とが外は、一人も法華經の行者はなきぞかし。いかに／＼とをも

ほか

いちにん

うところに、「頭破作七分」「口則閉塞」のなかりけるは、道理にて候けるなり。これら

ずはさしちが

くそくへいそく

は浅き罰なり。ただ一人二人等のことなり。日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。こ

ばち

いちにんににん

えんぶ だいいち

れをそしり、これをあだむ人を結構せん人は、閻浮第一の大難にあうべし。これは日本

けつじう

国をふりゆるがす正嘉の大地震、一天を罰する文永の大彗星等なり。これらをみよ。

しようか

だいいじしん

ぶんえい

だいすいせい

仏滅後の後、仏法を行ずる者にあだをなすといえども、今のごとくの大難は一度もなき

のち

なり。南無妙法蓮華經と一切衆生にすゝめたる人一人もなし。この徳はたれか一天に眼

まなこ

を合せ、四海に肩をならぶべきや。

疑ふて云く、たとひ正法の時は、仏の在世に対すれば根機劣なりとも、像・末に対す

しようぼう

こんきれつ

ぞう

まつ

れば最上じようきの上機はじめなり。いかでか正法の始はじめに法華經をば用ひざるべき。随つて馬鳴めみよう・

竜樹りゆうじゆ・提婆だいば・無著むじやく等も正法一千年の内にこそ出現させ給へ。

天親てんじん菩薩は千部の論師ろんじ、

ほつけるん

法華論を造りて諸經の中第一なかの義を存す。真諦しんだい三藏そうでんの相伝がつしに云く、「月支がつしに法華經を弘通くづう

せる家いえ五十余家よけ、天親はその一なり」と。已上正法なり。像法ぞうぼうに入いりては、天台大師像法

なかば

の半なかばに漢土に出現して、玄げんと文もんと止しとの三十卷を造りて法華經の淵底えんていを極きわめたり。像

すえ

法の末すえに伝教大師日本に出現して、天台大師の円慧えんね・円定えんじようの二法を我朝わがちように弘通せ

しむるのみならず、円頓えんどんの大戒場だいかいじようを叡山えいざんに建立こんりゆうして、日本一州皆同じく円戒の地に

かみいちじん

なして、上一人しもばんみんより下万民えんりやくじまで延曆寺を師範と仰がせ給ふは、あに像法の時、法華經

るふ

の広宣流布くわふにあらずや。

答へて云く、如来の教法は必ず機に随ふという事は世間の学者そんじの存知そんじなり。しかれども

じようこんじようち

仏教はしからず。上根上智じようこんじようちの人のために必ず大法を説くならば、初成道しじようどうの時なんぞ

法華經をとかせ給はざる。正法の先さき五百余年に大乘經を弘通すべし。有縁うえんの人に大法を

説かせ給ふならば、じようぼんだいおう 淨飯大王・まやぶにん 摩耶夫人にかんぶつさんまいきよう 觀仏三昧經・まやきよう 摩耶經をとくべからず。

むえん 無縁の惡人・ほうぼつ 謗法の者に秘法をあたえずば、かくとくびく 覺徳比丘は無量の破戒の者に涅槃經をさづ

くべからず。ふきよう 不輕菩薩は誹謗の四衆に向つていかに法華經をば流通せさせ給ひしぞ。

されば機に随ひて法を説くと申すは大なるびやつけん 僻見なり。

問うて云く、りゆうじゆ 竜樹・せしん 世親は法華經の実義をば宣べ給はずや。

答へて云く、宣べ給はず。

問うて云く、いか 何なるおしえ 教をかのべ給ひし。

答へて云く、けこん 華嚴・ほうとう 方等・はんにや 般若・だいにち 大日經等のごんだいじよう 權大乘・けんみつ 顯密の諸經をのべさせ給ひて、

法華經の法門をばの宣べさせ給はず。

問うて云く、な 何にをもつてこれをしるや。

答えて云く、りゆうじゆ 竜樹菩薩のしよぞう 所造のろん 論三十万偈。つく しかれども尽してかんど 漢土・日本にわたらざ

ればその心しりがたしといえども、漢土にわたれるじゆうじゆうび 十住毘婆沙論・ちゆうろん 中論・だいろん 大論等

をもつて、天竺てんじくの論をも比知ひちしてこれを知るなり。

疑ふて云く、天竺に残れる論の中に、わたれる論よりも勝すぐれたる論やあるらん。

答えて云く、竜樹菩薩の事は私に申すべからず。仏記きし給へり。我が滅後に竜樹菩薩と申

す人南天竺いに出いずべし。彼の人の所詮しよせんは中論という論にあるべし、と仏記し給ふ。随つ

て竜樹菩薩の流ながれ、天竺に七十家あり。七十人ともに大論師だいろんじなり。彼の七十家の人々は

皆中論を本とす。中論四卷二十七品ほんの肝心かんじんは「因縁所生法いんねんしよしよぼう」の四句の偈なり。こ

の四句の偈は華嚴・般若等の四教しきようさんたい三諦の法門なり。いまだ法華開會かいえの三諦をば宣のべ給

はず。

疑ふて云く、汝がごとくに料簡りようけんせる人ありや。

答えて云く、天台云く、「中論をもつて相比あいひすることなかれ」と。また云く、「天親てんじん

・竜樹りゆうじゆないがんれいねん内鑑そと冷然よろにして外は時の宜かなしきに適みふ」と等と云云。妙樂みょうらく云く、「もし破会はえ

を論ぜば、いまだ法華しに若じかざる故に」と云云。從義じゆぎ云く、「竜樹・天親いまだ天台

に若かず」と云云。

問うて云く、唐の末に不空三蔵一卷の論をわたす。その名を菩提心論となづく。竜猛

菩薩の造なり云云。弘法大師云く、「この論は竜猛千部の中の第一肝心の論」と云云。

答へて云く、この論一部七丁あり。竜猛の言ならぬ事、処々に多し。故に目錄にも或

は竜猛、或は不空と両方なり。いまだ事定まらず。その上、この論文は一代を括れる論

にもあらず。荒量なる事これ多し。先ず「唯真言法中」の肝心の文あやまりなり。

その故は、文証・現証ある法華經の即身成仏をばなきになして、文証も現証もあ

とかたもなき真言の經に即身成仏を立てて候。また「唯」という「唯」の一字は第一の

あやまりなり。事のていを見るに、不空三蔵の私につくりて候を、時の人にをも（重）

くせせんがために、事を竜猛によせたるか。その上、不空三蔵は誤る事かずをほし。

いわゆる法華經の觀智の儀軌に、寿量品を阿弥陀仏とかける、眼の前の大僻見。陀

羅尼品を神力品の次にをける、屬累品を経末に下せる。これらはいつかひなし。さ

るかと思れば、天台の大乗戒を盗んで代宗皇帝に宣旨を申し、五台山の五寺に立てたり。しかもまた真言の教相には天台宗をす（為）べしといえり。かたがた誑惑の事どもなり。他人の訳ならば用ふる事もありなん。この人の訳せる経・論は信ぜられず。惣じて月支より漢土に経・論をわたす人、旧訳・新訳に一百八十六人なり。羅什三蔵を除きては、いづれの人々も誤らざるはなし。その中に不空三蔵は殊に誤り多き上、誑惑の心頭なり。疑ふて云く、何にをもつて知るぞや、羅什三蔵より外の人々はあやまりなりとは。汝が禅宗・念仏・真言等の七宗を破るのみならず、漢土・日本にわたる一切の訳者を用ひざるか、いかに。

答へて云く、この事は余が第一の秘事なり。委細には向つて問ふべし。ただしすこし申すべし。羅什三蔵の云く、「我漢土の一切経を見るに、皆梵語のごとくならず、いかでかこの事を顯すべき。ただし一つの大願あり。身を不浄になして妻をたひ（帯）すべし。舌計り清浄になして仏法に妄語せじ。我死せば必ずやくべし。焼かん時、舌焼くるな

らば我が経をすてよ」と、常に高座こうざしてきかせ給ひしなり。上一人より下万民しもばんみんにいたるまで願がんして云く、「願くは羅什三蔵より後に死せん」と。終ついに死し給ふ後、焼きたてまつりしかば、不浄の身は皆灰となりぬ。御舌計おんしたばかりり火中に青蓮華しょうれんげ生てその上にあり。五色ごしきの光明を放ちて夜は昼のごとく、昼は日輪にちりんの御光をうばい給ひき。さてこそ一切の訳人やくにんの経々は軽くなりて、羅什三蔵の訳し給へる経々、殊に法華経は漢土にはやす／＼とひろまり候しか。

疑ふて云く、羅什已前はしかるべし。已後の善無畏ぜんむい・不空等ふくとうは如何いかん。

答へて云く、已後なりとも訳者の舌の焼くるをば、誤りありけりとしるべし。されば日本

ほつそうしゆつ

国に法相宗ほつそうしゆつのはやり（流行）たりしを、伝教大師責めさせ給ひしには、羅什三蔵は舌

げんじよう

じおん

焼けず、玄奘・慈恩は舌焼けぬとせめさせ給ひしかば、桓武天皇は道理とをばして天

台法華宗へはうつらせ給ひしなり。涅槃經の第三・第九等を見まいらすれば、我が仏法は

がつし

みよつこしめつたい

しゆじよう

とくどう

月氏より他国へわたらんの時、多くの謬誤出来して衆生の得道うすかるべしととか

れて候。されば妙樂大師は、「並に進退は人にあり、何ぞ聖旨に閑はらん」記九とこそあそばれて候へ。今の人々、いかに經のまゝに後世をねがうとも、あやまれる經々のまゝにねがわば得道もあるべからず。しかればとても仏の御とがにはあらじとか（書）かれて候。仏教を習ふ法には大小・權實・顯密はさてをく。これこそ第一の大事にては候らめ。

疑ふて云く、正法一千年の論師の内心には、法華經の実義の顯密の諸經に超過してあるよしはしろしめしながら、外には宣説せずして、ただ權大乘計りを宣べさせ給ふことはしかるべしとわをぼへねども、その義はすこしきこえ候ひぬ。像法一千年の半に天台智者大師出現して、題目の妙法蓮華經の五字を玄義十卷一千枚にかきつくし、文句十卷には始め「如是我聞」より終り「作礼而去」にいたるまで、一字一句に因縁・約教・本迹・觀心の四の釈をならべてまた一千枚に尽し給ふ。已上玄義・文句の二十卷には、一切經の心を江河として法華經を大海にたとえ、十方界の仏法の露一滴も漏さ

ず、妙法蓮華經の大海に入させ給いぬ。その上、天竺の大論の諸義一点ももらさず、漢  
 土南北の十師の義、破すべきをばこれをはし、取るべきをばこれを用ふ。その上、止觀  
 十卷を注して、一代の觀門を一念にすべ、十界の依正を三千につづめたり。この書の  
 文体は、遠くは月支一千年の間の論師にも超え、近くは戸那五百年の人師の釈にも勝れ  
 たり。故に三論宗の吉藏大師、南北一百余人の先達と長者らをすゝめて、天台大師の講  
 經を聞かんとする状に云く、「千年の興、五百の実、また今日にあり、乃至、南岳の叡聖、  
 天台の明哲、昔は三業住持し、今は二尊紹係す。あにただ甘露を震旦に灑ぐのみなら  
 ん。またまさに法鼓を天竺に震うべし。生知の妙悟、魏・晋より以来、典籍の風謡実  
 に連類なし。乃至、禅衆一百余の僧と共に、智者大師を奉請す」等と云云。  
 終南山の道宣律師、天台大師を讚歎して云く、「法華を照了すること、高輝の幽谷  
 に臨むがごとく、摩訶衍を説くこと、長風の大虚に遊ぶに似たり。たとひ文字の師  
 千群万衆ありて、数々彼の妙弁を尋ねるとも、よく窮むる者なし。乃至、義は月を指

すに同じ。乃至、宗は一極に歸す」と云云。

華嚴宗の法蔵法師、天台を讃して云く、「思禪師・智者等のごときは、神異に感通し

て迹登位に参わる。靈山の聴法、憶い今にあり」等と云云。真言宗の不空三蔵・含光

法師等、師弟共に真言宗をすて、天台大師に帰伏する物語に云く、「高僧伝に云く、不

空三蔵と親り天竺に遊びたるに、彼に僧あり。問うて云く、大唐に天台の教迹あ

り。最も邪正を簡び偏円を曉るに堪えたり。よくこれを訳してまさにこの土に至らし

むべきや」等と云云。この物語は含光が妙樂大師にかたり給ひしなり。妙樂大師この物

語を聞いて云く、「あに中国に法を失いて、これを四維に求むるにあらずや。しかも

この方に識ることある者少し。魯人のごときのみ」等と云云。身毒国の中に天台三十

卷のごとくなる大論あるならば、南天の僧いかでか漢土の天台の釈をねがうべき。これ

あに像法の中に法華經の実義顯れて、南閻浮提に広宣流布するにあらずや。

答へて云く、正法一千年、像法の前四百年、已上仏滅後一千四百余年に、いまだ論師の弘通

し給はざる一代超過の円定・円慧を漢土に弘通し給ふのみならず、その声月氏までも  
 きこえぬ。法華經の広宣流布にはにたれども、いまだ円頓の戒壇を立てられず。小乗の  
 威儀をもつて円の慧・定に切つけるは、すこし便なきにたり。例せば日輪の蝕する  
 がごとし、月輪のかけたるにいたり。いかにいわうや、天台大師の御時は大集經の読  
 誦多聞堅固の時にあひあて、いまだ広宣流布の時にあらず。

問うて云く、伝教大師は日本国の士なり。桓武の御宇に出世して、欽明より二百余年が  
 間の邪義をなんじやぶり、天台大師の円慧・円定を撰し給ふのみならず、鑑真和尚の弘通  
 せし日本小乗の三処の戒壇をなんじやぶり、叡山に円頓の大乗別受戒を建立せり。こ  
 の大事は仏滅後一千八百年が間の身毒・尸那・扶桑乃至一閻浮提第一の奇事なり。内  
 証は竜樹・天台等には、或は劣るにもや、或は同じくもやあるらん。仏法の人をすべ（統）  
 て一法となせる事は、竜樹・天親にもこえ、南岳・天台にもすぐれて見えさせ給ふなり。  
 惣じては如来御入滅の後一千八百年が間、この二人こそ法華經の行者にてはをはずれ。

故に秀句しゅうくに云く、「経に云く、もし須弥しゆみを接りて他方無数の仏土むしゆに擲なげ置かんも、またいまだこれ難かたしとせず。乃至なにし、もし仏の滅後に悪世の中において、よくこの経を説かん。これすなわちこれ難し等云云。この経を釈して云く、浅きは易く深きは難しとは釈迦しよはんの所判なり。浅きを去りて深きに就くは丈夫じやうぶの心なり。天台大師は釈迦に信順し、法華宗を助けて震旦しんたんに敷揚ふようし、叡山いつけの一家は天台に相承そうじようし、法華宗を助けて日本ぐずつに弘通す」と云云。釈の心は、賢劫けんこつ第九の滅げん、人壽にんじゆ百歳の時より、如来の在世五十年、滅後の一千八百余年が中間に、高さ十六万八千由旬ゆじゆん六百六十二万里の金山こんざんを、有人あるひと五尺の小身の手をもつて、方一寸二寸等の瓦礫かりやくをにぎりて一丁二丁までなぐるがごとく、雀鳥すずめのとぶよりもはやく鉄圍山てつちせんの外へなぐる者がありとも、法華経を仏のとかせ給ひしやうに説かん人は末法にはまれなるべし。天台大師・伝教大師こそ、仏説そつじに相似してとかせ給ひたる人にてをはすれとなり。天竺の論師はいまだ法華経へゆきつき給はず。漢土の天台已前の入師あるしは或あるいはすぎ、或はたらず。慈恩じおん・法蔵ほつぞう・善無畏ぜんむい等は、東を西といい、天

を地と申せる人々なり。これらは伝教大師の自讃にはあらず。

い 去ぬる延暦二十一年正月十九日、高雄山に桓武皇帝行幸なりて、六宗七大寺の碩徳善議

・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・

光証・観敏等の十有余人、最澄法師と召し合せられて宗論ありしに、或は一言に舌

を巻て二言三言に及ばず、皆一同に頭をかたづけ、手をあざ(又)う。三論の二蔵・三

時・三転法輪、法相の三時・五性、華嚴宗の四教・五教・根本枝末・六相十玄、

皆大綱をやぶらる。例せば大屋の棟梁のをれたるがごとし。十大徳の幔幢も倒れ

にき。その時、天子大に驚かせ給ひて、同じき二十九日に弘世・国道の両吏を勅使

として、重ねて七寺六宗に仰せ下されしかば、各々帰伏の状を載て云く、「竊に天台の

玄疏を見れば、惣じて釈迦一代の教を括りて、悉くその趣を顕すに通ぜざるところ

なく、独り諸宗に逾え殊に一道を示す。その中の所説甚深の妙理なり。七箇の大寺、六

宗の学生、昔よりいまだ聞かざるところ、かつていまだ見ざるところなり。三論・法相

久年くねんの諍あらそい、渙焉かんえんとして氷のごとく釈とけ、照然しょうねんとしてすでに明かなること、なお雲霧うんむを披ひらいて三光さんこうを見るがごとし。聖德しやうとくの弘化くわより以降このかた、今に二百余年の間、講ずるところの経論、その数多し。彼此理ひしりを争あらそいて、その疑いいまだ解とけず。しかるにこの最妙の円宗えんしゆう、なおいまだ闡揚せんやうせず。蓋けだしもつてこの間の群生ぐんじやう、いまだ円味えんみに応かなわざるか。伏ふして惟おもんみれば、聖朝せいちやう久しく如来の付ふを受け、深く純円の機を結び、一妙の義理始めてすなわち興顯こうけんし、六宗の学者初めて至極しごくを悟る。謂つべし、此界このかいの含靈がんれい、今よりは悉く妙円の船に載せ、早く彼岸ひがんに済わたることを得ん。乃至ないし、善議等ひ、牽きかれて休運きゆううんに逢あい、すなわち奇詞きしを聞けみす。深期じんごにあらざるよりは何ぞ聖世せいせ彼に託たくせんや」等と云云。彼の漢土かじようの嘉祥等は、一百余人をあつめて天台大師を聖人しやうにんと定めたり。今日本の七寺二百余人は、伝教大師を聖人しやうにんとがうしたてまつる。仏の滅後二千余年に及んで両国に聖人しやうにん二人出現せり。その上、天台大師みく末弘の円頓の大戒を叡山に建立し給う。これあに像法の末に法華経広宣流布するにあらずや。

答へて云く、迦葉・阿難等の弘通せざる大法を馬鳴・竜樹・提婆・天親等の弘通せる事、前の難に顕れたり。また竜樹・天親等の流布し残し給へる大法、天台大師の弘通し給ふ事、また難にあらわれぬ。また天台智者大師の弘通し給はざる円頓の大戒を、伝教大師の建立せさせ給ふ事、また顕然なり。ただし詮と不審なる事は、仏は説き尽し給へども、仏の滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親、乃至、天台・伝教のいまだ弘通しましませぬ最大の深秘の正法、経文の面に現前なり。この深法、今末法の始、五五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきやの事、不審（極りなき）なり。

問ふ、いかなる秘法ぞ。先づ名をきき、次に義をきかんとをもう。この事もし実事ならば、釈尊の二度世に出現し給ふか。上行菩薩の重ねて涌出せるか。いそぎ／＼慈悲をたれられよ。彼かの玄奘三蔵は六生を経て月氏に入つて十九年、法華一乗は方便教、小乗阿含経は真実教。不空三蔵は身毒に返りて寿命品を阿弥陀仏とかかれたり。これらは東を西という、日を月とあやまてり。身を苦しめてなにかせん、心に染てようなし。

さいわいわれら  
幸 我等末法に生れて、一步をあゆまずして三祇をこえ、頭を虎にか（飼）わずして  
むけんちようそう  
無見頂相をえん。

● 答へて云く、この法門を申さん事は、經文に候へばやすかるべし。ただしこの法門には先  
づ三つの大事あり。大海は広けれども死骸をとどめず。大地は厚けれども不孝の者をば載  
せず。仏法には五逆をたすけ、不孝をばすくう。ただし誹謗一闡提の者、持戒にして大  
智なるをばゆるされず。この三つのわざわひとは、いわゆる念仏宗と禅宗と真言宗となり。  
一には念仏宗は日本国に充滿して、四衆の口あそびとす。二に禅宗は三衣一鉢の大慢の  
比丘の四海に充滿して、一天の明導とをもへり。三に真言宗はまた彼等の二宗にはに  
るべくもなし。叡山・東寺・七寺・園城、或は官主、或は御室、或は長吏、或は檢校  
なり。かの内侍所の神鏡燼灰となりしかども、大日如来の宝印を仏鏡とたのみて、  
宝劍西海に入りしかども、五大尊をもつて国敵を切らんと思へり。これらの堅固の信  
心は、たとひ劫石はひすらぐともかたぶくべしとはみへず。大地は反覆すとも疑心をこ

りがたし。

彼の天台大師の南北をせめ給ひし時も、この宗いまだわたらず。この伝教大師の六宗をし  
 えたげ給ひし時ももれぬ。かたゞの強敵をまぬがれて、かへて大法をかすめ失う。そ  
 の上、伝教大師の御弟子慈覚大師、この宗をとりたてゝ叡山の天台宗をかすめをとして、  
 一向真言宗になししかば、この人には誰の人か敵をなすべき。かゝる僻見のたよりを  
 えて、弘法大師の邪義をもとがむる人もなし。安然和尚すこし弘法を難ぜんとせしか  
 ども、ただ華嚴宗のところ計りとがむるにて、かへて法華經をば大日經に対して沈みは  
 てぬ。ただ世間のたて入りの者のごとし。

問うて云く、この三宗の謬誤如何。

答えて云く、浄土宗は齊の世に曇鸞法師と申す者あり。本は三論宗の人、竜樹菩薩の十  
 住毘婆沙論を見て難行道・易行道を立てたり。道綽禪師という者あり。唐の世の者、  
 本は涅槃經をかうじけるが、曇鸞法師が浄土にうつる筆を見て、涅槃經をすてて浄土に

うつて聖道・浄土の二門を立てたり。また道綽が弟子善導という者あり。雜行・正

ぎよう

行を立つ。日本国に、末法に入つて二百余年、後鳥羽院の御宇に法然というものあり。

ことばいん ぎよう

一切の道俗をすすめて云く、

だうぶく

仏法は時機を本とす。法華經・大日經、天台・真言等の八

もと

宗九宗、一代の大小・顯密・権実等の經宗等は上根上智、正・像二千年の機のため

きようしゆう

しやう ぞう

なり。末法に入つては、いかに功をなして行ずるとも、その益あるべからず。その上、

こう

やく

みだねんぶつ

弥陀念仏にまじへて行ずるならば、念仏も往生すべからず。これわたくしに申すにはあ

らず。竜樹菩薩・曇鸞法師は「難行道」となづけ、道綽は「未有一人得者」ときらひ、

みういちにんとくしや

善導は「千中無一」となづけたり。

せんちゆうむいち

これらは他宗なれば御不審もあるべし。慧心の先徳にすぎさせ給へる天台・真言の智者

えしん せんとく

は末代にをはすべきか。かれ往生要集にかゝれたり。顯密の教法は予が死生をは

おうじようようしゆう

けんみつ

きようほう

よ ししやう

なるべき法にはあらず。また三論の永觀が十因等をみよ。されば法華・真言等をすて

ようかん じゆういん

じつそくじつしやう

て一向に念仏せば、十即十生百即百生とすゝめければ、叡山・東寺・園城・七寺等、

始は諍論じやうろんするやうなれども、往生要集じよの序の詞、道理かとみへければ、顕真座主けんしんざ落

させ給ひて法然が弟子となる。その上、たとひ法然が弟子とならぬ人人も、弥陀念仏は他

仏ににるべくもなく口ずさみとし、心よせにをもひければ、日本国皆一同に法然房の弟子

と見へけり。この五十年が間、一天四海一人もなく法然が弟子となる。法然が弟子となり

ぬれば、日本国一人もなく謗法ぼうぼうの者となりぬ。譬へば千人の子が一同に一人の親を殺害

せば、千人共に五逆の者なり。一人阿鼻あびに墮おちなば余人墮ちざるべしや。結句は法然流罪

をあだみて悪靈あくりようとなつて、我並われに弟子等をとがせし国主・山寺さんじの僧等らが身に入つて、

或は謀反むほんををこし、或は悪事をなして、皆関東にほろぼされぬ。わづかにのこれる叡山

・東寺等の諸僧は、俗男俗女にあなづらること、猿猴えんこうの人にわらはれ、俘囚えぞが童子わらへに

蔑如べつじよせらるるがごとし。

禅宗はまたこの便たよりを得て持斎等じさいとうとなつて人の眼まなこを迷まどわかし、たつとげなる気色なれば、

いかにひがほうもん（法門）をいぬくるへども、失とがともをばへず。禅宗と申す宗は、教きよう

げべつてん

外別伝と申して、釈尊の一切経の外ほかに迦葉尊者にひそかにさゝやかせ給えり。されば

禅宗をしらずして一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし。猿の月の影をとるにた

り云云。この故に日本国の中に不孝にして父母にすてられ、無礼ぶれいなる故に主君にかなだ

うせられ、あるいは若じゃくなる法師等の学文がくもんにものうき、遊女ゆうじよのものぐるわしき本性に叶

へる邪法なるゆへに、皆一同に持齋になりて、国の百姓ひやくしやうをくらう蝗虫いなむしとなれり。しか

れば天は天眼てんげんをいからかし、地神は身をふるう。

真言宗と申すは上かみの二つのわざわひにはにるべくもなき大僻見だいびやくけんなり。あら／＼これ

を申すべし。いわゆる大唐の玄宗皇帝の御宇に、善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵、

大日経・金剛頂経・蘇悉地経を月支よりわたす。この三経の説相分明なり。その極理

を尋ぬれば会二破二の一乗、その相を論ずれば印いんと真言しんこんと計りなり。なお華嚴けこん・般若

の三一相對の一乗にも及ばず。天台宗の爾前にぜんの別・円程べつ えんもなし。ただ蔵ぞう・通二教つうを面

とす。しかるを善無畏三蔵をもわく、この経文を蹟あわにいみ出だす程ならば、華嚴・法相

にもをこつかれ、天台宗にもわらわれなん。大事として月支よりは持来りぬ。さてもだ  
 せば本意ほんいにあらずとやをもひけん。天台宗の中に一行いちぎよう禪師ぜんしという僻人びやくにん一人あり。こ  
 れをかたらひて漢土の法門をかたらせけり。一行あじやり阿闍梨あじやりうちぬかれて、三論・法相・華  
 嚴等をあら／＼かたるのみならず、天台宗の立てられけるやうを申しければ、善無畏をも  
 はく、天台宗は天竺てんしゆくにして聞きしにもなをうちすぐきき(勝)れて、かさむべきやうもなかり  
 ければ、善無畏は一行をうちぬひて云いく、和僧わそうは漢土にはこざかしき者にてありけり。  
 天台宗は神妙しんみようの宗なり。今真言宗いまの天台宗にかさむところは、印と真言と計りなり、  
 といふければ、一行さもやとをもひければ、善無畏三蔵一行にかた(語)て云く、天台大  
 師の法華經に疏しよをつくらせ給へることく、大日經の疏を造りて真言を弘通くすうせんとをもう。  
 汝かきなんや、といふければ、一行が云く、やすう候。ただしいかやうにかき候べきぞ。  
 天台宗はにくき宗なり。諸宗は我われも／＼とあらそいをなせども、一切に叶かなはざる事一つ  
 あり。いわゆる法華經の序分に無量義經と申す經をもつて、前ぜん四十余年の経々をば、そ

の門を打うちふさぎ候ぬ。法華經ほつしほんの法師品・神力品じんりきほんをもつて後のちの經々をば、またふせがせぬ。肩をならぶ經々をば今こんせつ說の文をもつてせめ候。大日經をば三說の中にはいづくにかをき候べき、と問ひければ、その時に善無畏三藏おおい大に巧たくらんで云く、大日經に住心品じゆうしんほんという品ほんあり。無量義經の四十余年の經々を打はらうがごとし。大日經の入漫陀羅已下にゆうまんだら いげの諸品は、漢土にては法華經・大日經とて二本なれども、天竺にては一經のごとし。釈迦しゃか仏は舍利弗しやりほつ・弥勒みろくに向つて大日經を法華經となづけて、印と真言とをすててただ理計りばかりをとけるを、羅什三藏らじゆつこれをわたす。天台大師これを見る。大日如来、法華經を大日經となづけて金剛薩埵こんごうさだに向つてとかせ給ふ。これを大日經となづく。我われまのあたり天竺にしてこれを見る。されば汝がかくべきやうは、大日經と法華經とをば水と乳とのやうに一味となすべし。もししからば、大日經は已今いこんとう當の三說をば皆法華經のごとくうちをとすべし。さて印と真言とは、心法の一念三千しんぽうさんに莊嚴するならば、三密相応さんみつそうおうの秘法なるべし。三密相応する程ならば天台宗は意密なり。真言は甲こうなる將軍の、甲鎧よろいを帶して弓きう箭うせんを

横たへ、太刀を腰にはけるがごとし。天台宗は意密計りなれば、甲なる將軍の赤裸なるがごとくならん、といふければ、一行阿闍梨はこのやうにかきけり。漢土三百六十箇国にはこの事を知る人なかりけるかのあひだ、始には勝劣を諍論じょうろんしけれども、善無畏等是人がら重し、天台宗の人々は輕かりけり。また天台大師ほどの智ある者もなかりければ、ただ日々に真言宗になりてさてやみにけり。年ひさしくなれば、いよ／＼真言の誑惑おつわくの根ふかくかくれて候ひけり。

日本国の伝教大師、漢土にわたりて天台宗をわたし給ふついでに、真言宗をならひわたす。天台宗を日本の皇帝にさづけ、真言宗を六宗の大徳にならわせ給ふ。ただし六宗と天台宗の勝劣は入唐以前に定めさせ給ふ。入唐已後には円頓えんどんの戒場かいじょうを立てう立てじの論か、計りなかりけるかのあひだ、敵多くしては戒場の一事成じふじじがたしとやをぼしめしけん。また末法にせめさせんとやをぼしけん。皇帝の御前ごぜんにしても論ぜさせ給はず。弟子等にもはか／＼しくかたらせ給はず。ただし依憑集えびようしゅうと申す一卷の秘書あり。七宗の人々の天

台に落たるやうをかゝれて候文なり。かの文の序に真言宗の誑惑一筆みへて候。

弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に値ひ給ひて真言宗をならわせ給へり。御帰朝の後、一代の勝劣を判じ給ひけるには、第一真言・第二華嚴・第三法華と

弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に値ひ給ひて真言宗をならわせ給へり。御帰朝の後、一代の勝劣を判じ給ひけるには、第一真言・第二華嚴・第三法華と

弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に値ひ給ひて真言宗をならわせ給へり。御帰朝の後、一代の勝劣を判じ給ひけるには、第一真言・第二華嚴・第三法華と

弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に値ひ給ひて真言宗をならわせ給へり。御帰朝の後、一代の勝劣を判じ給ひけるには、第一真言・第二華嚴・第三法華と

弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に値ひ給ひて真言宗をならわせ給へり。御帰朝の後、一代の勝劣を判じ給ひけるには、第一真言・第二華嚴・第三法華と

弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に値ひ給ひて真言宗をならわせ給へり。御帰朝の後、一代の勝劣を判じ給ひけるには、第一真言・第二華嚴・第三法華と

弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に値ひ給ひて真言宗をならわせ給へり。御帰朝の後、一代の勝劣を判じ給ひけるには、第一真言・第二華嚴・第三法華と

弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に値ひ給ひて真言宗をならわせ給へり。御帰朝の後、一代の勝劣を判じ給ひけるには、第一真言・第二華嚴・第三法華と

かかれて候。この大師は世間の人々はもつてのほかに重んずる人なり。ただし仏法のこと

は、事は申すにをそれあれども、もつてのほかにあらき（荒量）事どもはんべり。この

事をあら／＼かんがへたるに、漢土にわたらせ給ひては、ただ真言の事相の印・真言計

り習ひつたえて、その義理をばくはしくもさはぐらせ給はざりけるほどに、日本にわたり

て後、大に世間を見れば、天台宗もつてのほかにかさみたりければ、我が重んずる真言

宗ひろめがたかりけるかのゆへに、本日本国にして習ひたりし華嚴宗をとりいだして、

法華經にまされるよしを申しけり。それも常の華嚴宗に申すやうに申すならば、人信ず

まじとやをばしめしけん。すこしいろをかえて、これは大日經、竜猛菩薩の菩提心論、

善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども、天台宗の人々いたうがめ申す事

善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども、天台宗の人々いたうがめ申す事

善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども、天台宗の人々いたうがめ申す事

善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども、天台宗の人々いたうがめ申す事

善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども、天台宗の人々いたうがめ申す事

善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども、天台宗の人々いたうがめ申す事

善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども、天台宗の人々いたうがめ申す事

善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども、天台宗の人々いたうがめ申す事

なし。

問うて云く、弘法大師の十住心論・秘蔵宝鑰・二教論に云く、「かくのごとき乗  
 じよう じよう じよう  
 々、自乗に名を得れども、後に望めば戲論と作す」。また云く、「無明の辺域にし  
 みよう ぶんい  
 て、明の分位にあらず」。また云く、「第四熟蘇味なり」。また云く、「震旦の人師  
 あらせ だいご  
 等、諍いて醍醐を盗みて、各自宗に名く」等と云云。これらの釈の心如何。  
 よ  
 答へて云く、予、この釈にをどろいて、一切経並に大日の三部経等をひらきみるに、華嚴  
 経と大日経とに対すれば法華経は戲論、六波羅蜜経に対すれば盗人、守護経に対すれば  
 むみよう へんいき  
 無明の辺域と申す経文は一字一句も候わず。この事はいとはかなき事なれども、この  
 もち  
 三、四百余年に日本国のそこばくの智者どもの用ひさせ給へば、定めてゆへあるかとを  
 もひぬべし。しばらくいとやすきひが（僻）事をばあげて、余事のはかなき事をしらすべ  
 し。

法華経を醍醐味と称することは陳・隋の代なり。六波羅蜜経は唐の半に般若三蔵これ

をわたす。六波羅蜜經の醍醐は陳・隋の世にはわたりてあらばこそ、天台大師は眞言の醍

醐をば盗ませ給わめ。かたがたれい傍例あり。日本の得とく一が云く、「天台大師は深密經の三時教を

やぶる、三寸の舌をもつて五尺の身をたつべし」とののしりしを、伝教大師これをただし

て云く、「深密經は唐とうの始はじめ、玄奘げんじようこれをわたす。天台は陳・隋の人、智者ちしや御入滅のちの後、

数箇年あつて深密經わたれり。死して已後にわたれる經をば、いかでか破はし給ふべき」と

せめさせ給ひて候しかば、得一はつまるのみならず、舌八つにさけて死し候ぬ。これは彼かれ

にはにるべくもなき悪口あつくなり。華嚴けこんの法蔵ほうぞう・三論さんろんの嘉祥かじよう・法相ほつそうの玄奘げんじよう・天台等なたい、乃至、

南北なんぼくの諸師しよし、後漢ごかんより已下いげの三蔵さんざう・人師にんしを、皆をさえて盗人とかゝれて候なり。その上、

また法華經を醍醐と称することは、天台等の私の言ことばにはあらず。仏涅槃經ほとけに法華經を

醍醐ととかせ給ひ、天親てんじん菩薩は法華經・涅槃經を醍醐とかゝれて候。竜樹りゆうじゆ菩薩は法華

經を妙藥みようやくとなづけさせ給ふ。されば法華經等を醍醐と申す人盗人ならば、釈迦しゃか・多宝たほう

・十方じつぽうの諸仏、竜樹・天親等は盗人にてをはすべきか。弘法こうぼうの門人等もんじん、乃至、日本の東

寺の真言師、如何に自眼の黑白はつたなくして弁へずとも、他の鏡をもつて自禍をし

れ。この外、法華經を戲論の法とかかるゝこと、大日經・金剛頂經等にたしかなる經文

をいだされよ。たとい彼々の經々に法華經を戲論ととかれたりとも、訳者の誤る事もあ

るぞかし。よく／＼思慮のあるべかりけるか。

孔子は九思一言、周公旦は沐には三にぎり、食には三たびはかれけり。外書のは

かなき世間の浅き事を習ふ人すら、智人はかう候ぞかし。いかにかゝるあさましき事は

ありけるやらん。かゝる僻見の末へなれば、彼の伝法院の本願とがうする聖覚房が

舍利講の式に云く、「尊高なる者は不二摩訶衍の仏なり。驢牛の三身は車を扶くるこ

と能わず。秘奥なる者は、両部曼荼羅の教なり、顯乗の四法は履を採るに堪えず」

と云云。顯乗の四法と申すは法相・三論・華嚴・法華の四人、驢牛の三身と申すは法華・

華嚴・般若・深密經の教主の四仏、これらの仏・僧は真言師に対すれば、聖覺・弘法

の牛飼、履物取者にもたらぬ程の事なりとかいて候。

彼の月がつし氏の大慢婆羅門だいまんばらもんは生知しやうちの博はく学がく、頭密けんみつ二道胸にうかべ、内外ないげの典てん籍せき掌たなごころにに  
 ぎる。されば王臣こつへん頭こつへんをかたづけ、万民ばんみん師範しはんと仰おほぐ。あまりの慢心まんしんに、世間せんに尊そん崇すうする  
 者は、大自在だいじざいてん天てん・婆簍ばそ天てん・那羅延ならえん天てん・大覺だいがく世尊ししやう、この四聖ししやうなり。我が座の四足ししきにせんと、座の足につくりて坐して法門しきを申しけり。当時の真言師けんあいろんじが釈迦しやうそ仏等ふつの一切いっけつの仏ぶつをかき  
 あつめて、灌頂かんじやうする時とき、敷しきまんだらとするがごとし。禅宗ぜんしゆの法師等ふしやうが云く、この宗は  
 仏ぶつの頂いただきをふむ大法だいふなりというがごとし。しかるを賢愛けんあい論師ろんしと申せし小僧しやうそうあり。彼かれを  
 ただすべきよし申せしかども、王臣わうしん万民ばんみんこれをもちゐず、結句けつこは大慢だいまんが弟子等だんな・檀那等だんな  
 に申しつけて、無量の妄語むりやうのわんごをかまへて悪口あくぐち打擲うちやくせしかども、すこしも命いのちをしまずの  
 ゝしりしかば、帝王ていおう賢愛けんあいをにくみてつめ（詰つめ）させんとし給たまひしほどに、かへりて大慢だいまんが  
 せめられたりしかば、大だい王天わうてんに仰おほぎ地に伏ふしてなげいての給たまはく、朕ちんはまのあたりこの  
 事をきひて邪見じけんをはらしぬ。先王せんおうはいかにこの者にたばらかされて阿鼻あび地獄じごくにをはすら

んと、賢愛論師の御足にとりつきて悲涙せさせ給ひしかば、賢愛の御計いとて、大慢を驢ろにのせて、五竺ごじくに面おもてをさらし給ひければ、いよ／＼惡心盛さかんになりて現身げんしんに無間地獄けんじごくに墮おちぬ。今の世の真言と禪宗等とはこれにかわれりや。

漢土さんがいぜんじの三階禪師云く、教主釈尊の法華經は第一、第二階しやうの正・像ぞうの法門なり。末代のために我がつくれる普經ふきやうなり。法華經を今の世よに行ぜん者は、十方じつぽうの大阿鼻獄だいあびごくに墮おつべし。末法の根機にあたらざるゆへなりと申して、六時ろくじの礼懺らいさん、四時しじの坐禪ざぜん、生身しやうしん仏のごとなりしかば、人多く尊たつとみて弟子万余人ありしかども、わづかの小女の法華經をよみにせめられて、当坐とうざには音こえを失ひ、後には大蛇になりて、そこばくの檀那・弟子並に小女・処女等しよにょににょをのみ食ひしなり。今の善導・法然等が「千中無一せんちゆうむいち」の惡義もこれにて候なり。これらの三つの大事はすでに久くなり候へば、いやしむべきにはあらねども、申さば信ずる人もやありなん。これよりも百千万億倍信じがたき最大の惡事はんべり。

慈覚大師は伝教大師の第三の御弟子なり。しかれども上一人より下万民にいたるまで、  
 伝教大師には勝れてをします人なりとをもらひ。この人真言宗と法華宗の奥義を極め  
 させ給ひて候が、真言は法華經に勝れたりとかかせ給へり。しかるを叡山三千人の大衆、  
 日本一州の学者等、一同歸伏の宗義なり。弘法の門人等は大師の法華經を華嚴經に劣る  
 とのかかせ給へるは、我がかたながらも少し強きやうなれども、慈覚大師の釈をもつてをも  
 うに、真言宗の法華經に勝れたることは一定なり。日本国にして真言宗を法華經に勝  
 ると立つるをば、叡山こそ強きかたきなりぬべかりつるに、慈覚をもつて三千人の口を  
 ふさぎなば、真言宗はをもつがごとし。されば東寺第一のかたうど（方人）慈覚大師には  
 すぐべからず。例せば浄土宗・禅宗は余国にてはひろまるとも、日本国にしては延暦寺  
 のゆるされなからんには、無辺劫はふとも叶ふまじかりしを、安然和尚と申す叡山第  
 一の古徳、教時諍論と申す文に九宗の勝劣を立てられたるに、第一真言宗・第二禅宗

・第三天台法華宗・第四華嚴宗等云云。この大だい謬びゆうしやく 釈につひて禅宗は日本国に充滿して、すでに亡国とならんとはするなり。法然が念仏宗のはやりて一國を失はんとする因縁いんねんは慧心えしんの往生おうじようしゆう要集じよの序よりはじまれり。師子の身の中の虫の師子を食くらふと、仏の記きし給ふはまことなるかなや。

伝教大師は日本国にして十五年が間、天台・真言等を自見せさせ給ふ。生知しやうちの妙悟みやうこにて、師なくしてさとらせ給ひしかども、世間の不審をはらさんがために、漢土わんたに亘わたりて天台・真言の二宗を伝へ給ひし時、彼土かのどの人々はやう／＼の義ありしかども、我心わがこころには法華は真言にすぐれたりとをぼしめししゆへに、真言宗の宗の名字なみょうじをば削けずらせ給ひて、天台宗の止觀しかん・真言等とかかせ給ふ。十二年の年分得度者二人ををかせ給ひ、重ねて止觀院に法華經・金光明經・仁王經の三部を鎮護國家の三部と定めて宣旨せんじを申し下くだし、永代えいたい日本國の第一の重宝神璽しんじ・宝劍ほうけん・内侍所ないしどころとあがめさせ給ひき。叡山第一の座主義真和尚・第二の座主円澄大師まではこの義相違なし。

第三の慈覺大師御入唐、漢土にわたりて十年が間、顯密二道の勝劣を八箇の大徳にな  
 らひつたう。また天台宗の人々、広修・維蠲等にならわせ給ひしかども、心の内にを  
 ぼしけるは、真言宗は天台宗には勝れたりけり。我が師伝教大師はいまだこの事をばく  
 はしく習はせ給はざりけり。漢土に久しくもわたらせ給はざりける故に、この法門はあら  
 うち（荒唐）にみ（見）をはしけるやとをぼして、日本国に帰朝し、叡山東塔止觀院の  
 西に惣持院と申す大講堂を立て、御本尊は金剛界の大日如来、この御前にして大日經  
 の善無畏の疏を本として、金剛頂經の疏七卷・蘇悉地經の疏七卷、已上十四卷をつく  
 る。この疏の肝心の釈に云く、「教に二種あり。一は顯示教、謂く三乗教なり。世俗  
 と勝義といまだ円融せざるが故に。二は秘密教、謂く一乗教なり。世俗と勝義と一体  
 にして融するが故に。秘密教の中にまた二種あり。一には理秘密の教、諸の華嚴・般  
 若・維摩・法華・涅槃等なり。ただ世俗と勝義との不二を説きて、いまだ真言・密印の事  
 を説かざるが故に。二には事理俱密の教、謂く大日經・金剛頂經・蘇悉地經等なり。ま

た世俗せぞくと勝義しょうぎとの不二を説き、また真言・密印の事を説くが故に「」等と云云。釈の心  
 は、法華經と真言の三部との勝劣を定めさせ給ふに、真言の三部經と法華經とは、所詮しよせん  
 の理りは同じく一念三千の法門なり。しかれども密印と真言等の事法じほうは、法華經はかけて  
 をはせず。法華經は理秘密、真言の三部經は事理俱密なれば、天地雲泥てんちうんでいなりとかかれた  
 り。しかも、この筆は私の釈にはあらず。善無畏三藏の大日經の疏の心なりとをばせども、  
 なを／＼二宗の勝劣不審にやありけん。はたまた他人の疑をさんぜんとやをばしけん。大  
 師 慈覺なり の伝に云く、「大師二經の疏じよを造り、功こうを成なし已畢おほりて、心中に独り謂おもえ  
 らく、この疏じよぶつ仏意に通ずるや否いなや。もし仏意に通ぜざれば、世に流伝せず。仍よくて仏像の  
 前に安置あんちし、七日七夜深誠しんじふしうを翹企ききうし、祈請きしふを勤修こんしゆす。五日の五更ごごうに至つて夢みらく、  
 正午しやうみに當りて日輪を仰ぎ見て、弓をもつてこれを射るに、その箭日輪やあたに當りて、日輪す  
 なわち転動てんどうすと。夢覺さめての後、深く仏意に通達つうだつせりと悟り、後世こうせいに伝ふべし「」等と  
 云云。慈覺大師は本朝ほんちやうにしては伝教・弘法の兩家りやうけを習ひきわめ、異朝いちちやうにしては八大

徳並に南天の宝月三蔵等に、十年が間最大事の秘法をきわめさせ給へる上、二經の疏を

つくり了り、重ねて本尊に祈請をなすに、智慧の矢すでに中道の日輪にあたりてうちを

どろかせ給ひ、歡喜のあまりに仁明天皇に宣旨を申しそへさせ給ひ、天台座主を真言

の官主となし、真言の鎮護国家の三部とて、今に四百余年が間、碩学稻麻のごとし、渴

仰竹葦に同じ。されば桓武・伝教等の日本国建立の寺塔は、一字もなく真言の寺と

なりぬ。公家も武家も一同に真言師を召して師匠とあをぎ、官をなし寺をあづけたぶ。仏

事の木画の開眼供養は、八宗一同に大日仏眼の印・真言なり。

疑ふて云く、法華經を真言に勝ると申す人はこの釈をばいかんがせん。用ふべきか、ま

たすつべきか。

答ふ、仏の未来を定めたまうに云く、「法に依りて人に依らざれ」。竜樹菩薩云く、

「修多羅に依るは白論なり。修多羅に依らざるは黒論なり」。天台云く、「また修多

羅と合せば録してこれを用ふ。文なく義なきは信受すべからず」。伝教大師云く、「仏

説に依憑えびようして、口伝を信ずることなかれ」等と云云。これらの經・論・釈のごとき  
 ば、夢を本もとにはすべからず。ただついさして法華經と大日經との勝劣を、分明ぶんみように説き  
 たらん經論の文こそたいせちに候はめ。ただし印・真言なくば木画もくえの像の開眼かいげんの事、こ  
 れまたをこの事なり。真言のなかりし已前には木画の開眼はなかりしか。天竺てんじく・漢土かんど・  
 日本には真言宗已前の木画の像は或あるいは行き、或は説法いし、或は御物語おんものがたりあり。印・真言  
 をもて仏を供養せしよりこのかた、利生りじようもかたぐ失うせたるなり。これは常の論談の義な  
 り。この一事いちじにをいては、ただし日蓮は分明ぶんみようの証拠を余所に引くべからず。慈覺大師  
 の御釈を仰いで信じて候なり。

問うて云く、何いかにと信ぜらるるや。

答へて云く、この夢の根源は、真言は法華經に勝すぐると造り定めての御ゆめなり。この夢吉夢きちむ  
 ならば、慈覺大師の合せあわさせ給ふがごとく真言勝すぐるべし。ただし日輪を射るとゆめにみ  
 たるは吉夢なりといふべきか。内典ないてん五千七百余卷・外典げてん三千余卷の中に、日を射るとゆ

めに見て吉夢なる証拠をうけ給はるべし。少少これより出し申さん。阿闍世王は天より  
 月落るとゆめにみて、耆婆大臣に合せさせ給ひしかば、大臣合せて云く、仏の御入滅  
 なり。須拔多羅、天より日落るとゆめにみる。我とあわせて云く、仏の御入滅なり。修羅  
 は帝釈と合戦の時、まず日月をいたてまつる。夏の桀・殷の紂と申せし悪王は、常  
 に日をいて身をほろぼし国をやぶる。摩耶夫人は日ははらむとゆめにみて悉達太子をう  
 ませ給ふ。かるがゆへに仏のわらわなをば日種という。日本国と申すは、天照太神  
 の日天にしてみしますゆへなり。さればこのゆめは、天照太神・伝教大師・釈迦仏・法華  
 経をいたてまつれる矢にてこそ二部の疏は候なれ。日蓮は愚癡の者なれば、経論もしらず。  
 ただこの夢をもつて法華経に真言すぐれたりと申す人は、今生には国をほろぼし、家を  
 失ひ、後生にはあび地獄に入るべしとはしりて候。  
 今現証あるべし。日本国と蒙古国との合戦に、一切の真言師の調伏を行ひ候へば、  
 日本かちて候ならば、真言はいみじかりけりとをもひ候ひなん。ただし承久の合戦に

そこばくの真言師のいのり候ひしが、調伏せられ給ひし権の大夫殿はかたせ給ひ、後鳥  
ばいん おき  
 羽院は隠岐の国へ、御子の天子は佐渡の嶋々へ調伏しやりまいらせ候ぬ。結句は野干  
みこ さど じようぶく  
 のなき（鳴）の己が身にをうなるやうに、「還著於本人」の経文にすこしもたがわず。  
おの げんじやく おほんにん  
 叡山の三千人がまくらにせめられて、一同にしたがいはてぬ。しかるにまたかまくら、日  
 本を失はんといのかと申すなり。これをよく／＼する人は一閭浮提一人の智人となる  
いちえんぶだいいちにん ちにん  
 べし。よく／＼するべきか。今はかまくらの世さかなるゆへに、東寺・天台・蘭城・  
おんじよう  
 七寺の真言師等と、並びに自立をわすれたる法華宗の謗法の人々、関東にをちくだりて、  
じりゆう  
 頭をかたづけ、ひざをかがめ、やう／＼に武士の心をとりにて、諸寺・諸山の別当となり、  
こうへ  
 長吏となりて、王位を失ひし悪法をとりいだして、国土安穩といのれば、将軍家並  
ちようり こくどあんのん しやうぐんけ  
 びに所従の侍已下は、国土の安穩なるべき事なんめりとうちをもちてあるほどに、  
しよじゆう さむらい  
 法華經を失ふ大禍の僧どもを用ひらるれば、国定めてほろびなん。亡国のかなしさ、亡  
たいか  
 身のなげかしさに、身命をすてゝこの事をあらわすべし。国主世を持つべきならば、  
しんみよう よ たも

あやしとをもひて、たづぬべきところに、ただざんげんのことばのみ用ひて、やう／＼の  
 あだをなす。しかるに法華經守護の梵天・帝釈・日月・四天・地神等は、古の謗法  
 をば不思議とはをぼせども、これをしれる人なければ、一子の悪事のごとくうちゆるして、  
 いつわりをろかなる時もあり、またすこしつみしらする時もあり。今は謗法を用ひたる  
 だに不思議なるに、まれ／＼諫曉する人をかへりてあだをなす。一日二日・一月二月・  
 一年二年ならず数年に及ぶ。かの不輕菩薩の杖木の難に値ひしにもすぐれ、覺徳比丘  
 の殺害に及びしにもこえたり。しかる間、梵・釈の二王・日月・四天・衆星・地神等  
 やう／＼にいかり、度々いさめられるれども、いよ／＼あだをなすゆへに、天の御計  
 ひとして、隣国の聖人にをほせつけられてこれをいましめ、大鬼神を国に入れて人の心  
 をたばらかし、自界叛逆せしむ。吉凶につけて瑞大なれば難多かるべきことわりにて、  
 仏滅後二千二百三十余年が間、いまだいでざる大長星、いまだふらざる大地しん出来せ  
 り。漢土・日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度々ありしかども、いまだ日蓮ほど法

華經のかたうど（方人）して、国土に強敵多くまうけたる者なきなり。まづ眼前の事を  
もつて日蓮は閻浮第一の者としるべし。

仏法日本にわたて七百余年、一切經は五千七千、宗は八宗十宗、智人は稻麻のごとし、弘通  
は竹葦ちくいににたり。しかれども仏には阿弥陀仏、諸仏の名号には弥陀の名号ほどひろまり

てをはするは候はず。この名号を弘通する人は、慧心えしんは往生要集をつくる、日本国三分  
が一は一同の弥陀念仏者。永觀ようかんは十因と往生講おうじょうこうの式をつくる。扶桑三分が二分は一同

の念仏者。法然せんちやくをつくる、本朝一同の念仏者。しかれば今の弥陀の名号を唱ふ  
る人々は一人いちにんが弟子にはあらず。この念仏と申すは双觀經・觀經・阿弥陀經の題名

なり。権大乘經の題目の広宣流布するは、実大乘經の題目の流布せんずる序じょにあらずや。

心あらん人はこれをすい（推）しぬべし。権經流布せば実經流布すべし。権經の題目流布

せば実經の題目もまた流布すべし。欽明きんめいより当帝とうていにいたるまで七百余年、いまだきかず、

いまだ見ず、南無妙法蓮華經と唱へよと他人をすゝめ、我われと唱へたる智人ちにんなし。日出ぬ

れば星かくる。賢王<sup>きた</sup>来れば愚王ほろぶ。実経流布せば権経のとどまり、智人<sup>ちにん</sup>南無妙法蓮華經と唱えは愚人<sup>ぐにん</sup>のこれに随はんこと、影と身と、声と響<sup>ひびき</sup>とのごとくならん。日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし。これをもつてすいせよ。漢土・月支にも一閻浮提の内にも肩をならぶる者はあるべからず。

問うて云く、正嘉<sup>しやうか</sup>の大地しん・文永の大慧星<sup>すいせい</sup>はいかなる事によつて出来<sup>しゆつたい</sup>せるや。

答へて云く、天台云く、「智人<sup>ちにん</sup>は起<sup>き</sup>を知り、蛇<sup>じゃ</sup>は自<sup>おのずか</sup>ら蛇を識<sup>し</sup>る」等と云云。

問うて云く、心いかん。

答へて云く、上行<sup>じやうぎやう</sup>菩薩の大地より出現し給ひたりしをば、弥勒菩薩<sup>みろく</sup>・文殊師利菩薩<sup>もんじゆしり</sup>・

觀世音菩薩<sup>かんぜおん</sup>・藥王菩薩<sup>やくおう</sup>等の四十一品<sup>ぼん</sup>の無明<sup>むみよう</sup>を断ぜし人々も、元品<sup>がんぼん</sup>の無明を断ぜざれば

愚人といわれて、寿量品の南無妙法蓮華經の末法に流布せんずるゆへに、この菩薩を召し出<sup>いだ</sup>されたるとはしらざりしという事なり。

問うて云く、日本・漢土・月支の中にこの事を知る人あるべしや。

答へて云く、見思けんじを断尽だんじんし、四十一品の無明を尽せる大菩薩だにもこの事をしらせ給はず、いかにいわうや、一毫いちごうの惑わくをも断ぜぬ者どもこの事を知るべきか。

問うて云く、智人なくばいかでかこれを対治たいじすべき。例せば病やまいの所起しよきを知らぬ人の、病人を治じすれば人必ず死す。この災わざわいの根源こんげんを知らぬ人々がいのりをなさば、国まさに亡びん事疑ひなきか。あらあさましや／＼。

答へて云く、蛇じやは七日が内の大雨をしり、鳥からすは年中の吉凶をしる。これすなわち大竜の所従しよじゆう、また久学くがくのゆへか。日蓮は凡夫ぼんぷなり。この事をするべからずといえども、汝等なんじらにほぼこれをさとさん。彼の周の平王の時、禿かむろにして裸なる者出現せしを、辛有しんゆうといふし者うらなつて云く、「百年が内に世ほろびん」。同じき幽王ゆうおうの時、山川くずれ、大地ふるひき。白陽はくやうと云ふ者かんが勘へていはく、「十二年の内に大王事ことに値せ給ふべし」。今の大地震・大長星等は、国主日蓮をにくみて、亡国の法たる禅宗と念佛者と真言師をかたうどせらるれば、天いからせ給ひていださせ給ふところの災難なり。

問うて云く、なにをもつてこれを信ぜん。

答へて云く、最勝王経に云く、「悪人を愛敬あいきようし、善人を治罰ちばつするによるが故に、星宿せいしゆく

及び風雨皆時ときをもつて行われず」と等と云云。この経文のときんば、この国に悪人のあ

るを、王臣これを帰依きえするという事疑いなし。またこの国に智人ちにんあり。国主これをにく

みて、あだすという事もまた疑いなし。また云く、「三十三天の衆しゆ、咸忿怒みなふんぬの心を生じ、

変怪へんげの流星墮りゆううせいおち、二の日俱時ひくじに出で、他方の怨賊おんぞく来りて、国人喪乱こくじんそうらんに遭わん」と等と

云云。すでにこの国に天変てんべんあり、地天ちようあり。他国よりこれをせむ。三十三天の御いかり

あることまた疑いなきか。仁王経にんのうきように云く、「諸もろもろの悪比丘みょうり、多く名利を求め、国王

・太子・王子の前において、自ら破仏法みずかの因縁はぶつぽう・破国の因縁いんねんを説く。その王別はこくずし

てこの語ことばを信聴しんちようす」と等と云云。また云く、「日月度を失ひ、時節反逆ほんぎやくし、或は

赤日出しゃくじつで、或は黒日出で、一三四五の日出で、或は日触して光なく、或は日輪一重二重

四五重輪現しやくじつず」と等と云云。文もんの心は、悪比丘等国に充滿して、国王・太子・王子等をた

ばらかして、破仏法・破国の因縁をとかば、その国の王等、この人にたばらかされてをば  
 すやう、この法こそ持仏法の因縁・持国の因縁とをもひ、この言ををさめ（納）て行  
 ならば日月に変あり、大風と大雨と大火等出来し、次には内賊と申して親類より大兵乱  
 をこり、我がかたうどしぬべき者をば皆打失ひて、後には他国にせめられて、或は自殺  
 し、或はいけどりにせられ、或は降人となるべし。これ偏に仏法をほろぼし、国をほ  
 るぼす故なり。守護経に云く、「彼の釈迦牟尼如来の所有の教法は、一切の天魔・外道  
 ・悪人・五通の神仙も、皆乃至少分をも破壊せず。しかるに、この名相ある諸の悪沙  
 門、皆悉く毀滅して、余りあることなからしめん。須弥山をたとい三千界の中の草木を  
 尽して薪となし、長時に焚焼すとも一毫も損ずることなきに、もし劫火起り、火内  
 より生じ、須臾に焼滅して、灰燼を余すことなきがごとし」等と云云。蓮華面經に  
 云く、「仏、阿難に告げたまわく、譬えば師子の命終せんに、もしは空、もしは地、も  
 しは水、もしは陸、所有の衆生、あえて師子の穴を食わず。ただ師子自ら諸の虫を

生じて、自ら師子の穴を食うがごとし。阿難、我が仏法は余の能く壞るにあらず。これ  
 我が法の中の諸の悪比丘、我が三大阿僧祇劫に積行し勤苦し集むる所の仏法を破ら  
 んこ等と云云。經文の心は、過去の迦葉仏、釈迦如来の末法の事を訖哩枳王にかたら  
 せ給ひ、釈迦如来の仏法をばいかなるものがうしなうべき。大族王の五天の堂舎を焼払い、  
 十六大国の僧尼を殺せし、漢土の武宗皇帝の九国の寺塔四千六百余所を消滅せしめ、僧  
 尼二十六万五百人を還俗せし等のごとくなる悪人等は、釈迦の仏法をば失ふべからず。  
 三衣を身にまとひ、一鉢を頸にかけ、八万法蔵を胸にうかべ、十二部經を口にずう（誦）  
 せん僧侶が、彼の仏法を失うべし。譬へば須弥山は金の山なり。三千大千世界の草木  
 をもつて四天・六欲に充滿してつみこめて、一年二年百千万億年が間やくとも、一分も  
 損ずべからず。しかるを劫火をこらん時、須弥の根より豆計りの火いでて須弥山をやく  
 のみならず、三千大千世界をやき失うべし。もし仏記のごとくならば、十宗・八宗・内典  
 の僧等が、仏教の須弥山をば焼き払うべきにや。小乗の俱舎・成実・律僧等が大乗を

そねむ胸の瞋<sup>しんに</sup>恚<sup>ほのお</sup>は炎なり。真言の善無畏等・禅宗の三階等・浄土の善導等は、仏教の師子の肉より出来<sup>しゅつたい</sup>せる蝗虫<sup>こうちゅう</sup>の比丘なり。伝教大師は三論・法相・華嚴等の日本の碩<sup>せき</sup>徳等を六虫とかかせ給へり。日蓮は真言・禅宗・浄土等の元祖<sup>がんそ</sup>を三虫となづく。また天台宗の慈覺・安然・恵心等は法華經・伝教大師の師子の身の中の三虫なり。これらの大謗法の根源をただす日蓮にあだをなせば、天神をしみ、地祇<sup>ちぎ</sup>もいからせ給ひて、災夭<sup>さいよう</sup>も大に起るなり。されば心うべし。一閻浮提第一の大事を申すゆへに、最第一の瑞相ここにをこれり。

あわれなるかなや、なげかしきかなや、日本国の人皆無間大城<sup>むけんだいじょう</sup>に墮<sup>お</sup>ちむ事よ。悦<sup>よろこば</sup>しきかなや、樂<sup>たのしい</sup>かなや、不肖<sup>ふしょう</sup>の身として今度心田<sup>こんどしんでん</sup>に仏種<sup>ぶつしゅ</sup>をうえたる。いまにしもみよ。大蒙古国数万艘<sup>すひやうせん</sup>の兵船<sup>ひやうせん</sup>をうかべて日本国をせめば、上一人<sup>かみいちじん</sup>より下も万民にいたるまで、一切の仏寺・一切の神寺<sup>しんじ</sup>をばなげすて、各々<sup>おのおの</sup>声をつるべて南無妙法蓮華經／＼と唱へ、<sup>たなこころ</sup>掌<sup>てしほう</sup>を合せて、たすけ給へ日蓮の御房、日蓮の御房とさけび候はんずるにや。例せば

月支の大族王は幼日王に掌をあわせ、日本の盛時はかじわらをうやまう。大慢のものは  
 敵に随ふという、このことわり（此理）なり。彼の輕毀大慢の比丘等は、始には杖木  
 をとゝのへて不輕菩薩を打しかども、後には掌をあはせて失をくゆ。提婆達多は釈尊  
 の御身に血をいだししかども、臨終の時には南無と唱ひたりき。仏とだに申したりしか  
 ば地獄には墮つべからざりしを、業ふかくしてただ南無とのみとなへて仏とはいわず。  
 今日本国の高僧等も南無日蓮聖人となえんとすとも、南無計りにてやあらんずらん。  
 ぶびんぶびん。

外典に云く、未萌をしるを聖人という。内典に云く、三世を知るを聖人という。余  
 に三度のかうみやう（高名）あり。一には、去し文応元年 太歳庚申 七月十六日に  
 立正安国論を最明寺殿に奏したてまつりし時、宿谷の入道に向て云く、禅宗と念仏宗  
 とを失ひ給ふべしと申させ給へ。この事を御用ひなきならば、この一門より事をこりて、  
 他国にせめられさせ給ふべし。二には、去し文永八年九月十二日申の時に平左衛門尉

に向て云く、日蓮は日本国の棟梁とうりようなり。予われを失ふは日本国の柱礎はしらを倒すなり。只今に  
 自界じかい反逆はんぎやく難なんとてどしうちして、他国たこく侵逼しんびつ難なんとてこの国の人々他国に打殺さるのみな  
 らず、多くいけどりにせらるべし。建長寺・寿福寺じゆふくじ・極楽寺ごくらくじ・大仏だいぶつ・長樂寺ちようらくじ等の一切  
 の念仏者・禅僧等が寺塔をばやきはらいて、彼等が頸くびをゆひのはまにて切らずば、日本  
 国必ずほろぶべしと申し候おわひ了んぬ。第三には、去年こぞ 文永十一年 四月八日、左衛門  
 尉に語つて云く、王地に生れたれば身をば随へられたてまつるやうなりとも、心をば随へ  
 られたてまつるべからず。念仏むけんごくの無間獄・禅てんまの天魔そいの所為なる事は疑なし。殊ことに真言宗  
 がこの国土おおいの大なるわざわひにては候なり。大蒙古を調伏じようふくせん事、真言師には仰せ付  
 けらるべからず。もし大事を真言師調伏するならば、いよ／＼いそいでこの国ほろぶべし  
 と申せしかば、頼綱よりつな問うて云く、いつごろ（何頃）かよせ候べき。日蓮言いわく、経文には  
 いつとはみへ候はねども、天みの御けしきいかりすくなからず、きうに見へて候。よも今年  
 はすこし候はじと語りたりき。この三つの大事は、日蓮が申したるにはあらず。ただ偏ひとえ

に釈迦如来の御みたましい神我が身に入りかわせ給ひけるにや。我が身ながらも悦び身にあまる。

法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり。經に云く、「所謂諸法如是相」と申すは

何事ぞ。十如是の始の相そうによぜ如是が第一の大事にて候へば、仏は世にいでさせ給ふ。「智人ちにな

は起きをしる、蛇じゃはみづから蛇をしる」とはこれなり。衆流しゆるあつまりて大海となる。微塵みじん

つもりて須弥山しゆみせんとなれり。日蓮が法華經を信じ始しは、日本国には一滄たい一微塵みじんのごとし。

法華經を二人・三人・十人・百千万億人唱え伝うるほどならば、妙覺みょうかくの須弥山ともなり、

大涅槃だいねはんの大海ともなるべし。仏になる道はこれよりほかにまたもとむる事なかれ。

問うて云く、第二の文永八年九月十二日の御勘氣ごかんきの時は、いかにとして我われをそん（損）

せば自他のいくさをこるべしとはしり給ふや。

答ふ、大集經だいしつきやう 五十に云く、「もしまた、諸の刹利・國王諸の非法をなし、世尊しやうもんの聲聞

の弟子を悩乱のうらんし、もしはもつて毀罵きめし、刀杖とうじやうをもて打斫ちやうしやくし、及び衣鉢種種えはつの資具を

奪い、もしは他の給施きゆうせに留難をなす者あらば、我等われら、彼をして自然じねんに卒にわかに他方の怨敵おんてき

を起さしめ、及び自界の国土にもまた、兵起して飢疫・飢饉・非時の風雨・鬭諍言訟・譏謗せしめ、またその王をして久しからずしてまたまさに己が国を亡失せしめん」と等と云云。

それ諸經に諸文多しといえども、この經文は身にあたり、時にのぞんで殊に尊くをぼうるゆへに、これをせんじいだす。この經文に我等とは、梵王と帝釈と第六天の魔王と日月と四天等の三界の一切の天竜等なり。これらの上主、仏前に詣して誓つて云く、仏の滅後、正法・像法・末代の中に、正法を行ぜん者を邪法の比丘等が国主にうつたへば、王に近きもの、王に心よせなる者、我がたつとしとをもう者のいうことなれば、理不尽に是非も弁えず、彼の智人をさんぐとはぢ（恥）にをよばせなんどせば、その故ともなく、その国ににわかに大兵乱出現し、後には他国にせめらるべし。その国主もうせ、その国もほろびなんずととかれて候。いたひ（痛）とかゆき（痒）とはこれなり。日蓮が身には今生にはさせる失なし。ただ国をたすけんがため、生国の恩をほうぜん

と申せしを、御用おんもちひなからんこそ本意にあらざるに、あまさへ（剩）召し出いだして、法華經の第五の巻を懷中かいちゆうせるをとりいだして、さんぐとさいなみ、結句はこうぢ（小路）をわたしなんどせしかば、申したりしなり。日月、天に処しよし給ひながら、日蓮が大難にあうを今度かわらせ給はずは、一には日蓮が法華經の行者ならざるか、忽たちまに邪見をあらたむべし。もし日蓮法華經の行者ならば、忽に国にしろしを見せ給へ。もししからずば、今の日月等は釈迦・多宝・十方の仏をたぶらかし奉る大妄語の人なり。提婆だいばが虚誑罪こおうざい、俱伽利くぎやりが大妄語にも百千万億倍すぎさせ給へる大妄語の天なりと、声をあげて申せしかば、忽しゆつたいに出来せる自界叛逆難じかいほんぎやくなんなり。されば国土いたくみだれば、我が身はいうにかひなき凡夫なれども、御經おんきようを持ちまいらせ候分齊ぶんざいは、当世とうせいには日本第一の大人だいにんなりと申すなり。

問うて云く、慢煩惱は七慢・九慢・八慢あり。汝が大慢は仏教に明あかすところの大慢にも

百千万億倍すぐれたり。彼の徳光論師は弥勒菩薩を礼せず、大慢婆羅門は四聖を座とせり。大天は凡夫にして阿羅漢となる、無垢論師が五天第一といひし、これらは皆阿鼻に堕ちぬ。無間の罪人なり。汝いかでか一閻浮提第一の智人となれる。大地獄に堕ちざるべしや。をそろし／＼。

答へて云く、汝は七慢・九慢・八慢等をばしれりや。大覺世尊は三界第一とならせ給ふ。一切の外道が云く、「只今天に罰せらるべし。大地われて入なん」。日本国の七寺三百余人が云く、「最澄法師は大天が蘇生か、鉄腹が再誕か」等と云云。しかりといえども天も罰せず、かへて左右を守護し、地もわれず、金剛のごとなりぬ。伝教大師は叡山を立てて一切衆生の眼目となる。結句七大寺は落て弟子となり、諸国は檀那となる。されば現に勝れたるを勝れたりという事は、慢にて大功徳となりけるか。伝教大師云く、「天台法華宗の諸宗に勝れたるは、所依の經に拠るが故なり。自讃毀他にあらず」と等と云云。法華經第七に云く、「衆山の中に須弥山これ第一なり。この法華經もまたか

くのごとし。諸經の中において最もこれその上なり」等と云云。この經文は、已説いせつの華

嚴・般若・大日經等、今説の無量義經、當説の涅槃經等の五千七千、月支・竜宮・四王天

・忉利天・日月の中の一經、とうりてん尽十方界の諸經は土山・黒山・小鉄圍山・大鉄圍山

のごとし。日本国にわたらせ給へる法華經は須弥山のごとし。また云く、「よくこの經

典を受持じゆじすることあらん者もまたかくのごとし。一切衆生しゆじやうの中においてまたこれ第一

なり」等と云云。この經文をもつて案ずるに、華嚴經たもとを持ふげんる普賢菩薩・解脫月菩薩等、

竜樹菩薩・馬鳴菩薩めみやう・法蔵大師・清涼國師・則天皇后・審祥大德・良弁僧正

・聖武天皇・深密・般若經しやうむを持たもとる勝義生菩薩・須菩提尊者・嘉祥大師・玄奘

三蔵・太宗・高宗・觀勒・道昭・孝德天皇、真言宗の大日經たいそつを持たもとる金剛薩埵・竜

猛菩薩・竜智菩薩・印生王・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・玄宗・代宗・

惠果・弘法大師・慈覺大師、涅槃經けいかを持たもちし迦葉童子菩薩・五十二類・曇無讖三蔵・

光宅寺法雲・南三北七の十師等よりも、末代惡世の凡夫の一戒たもも持たず、一闡提いつせんだいのご

とくに人には思はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は仏になる  
 道なしと強盛に信じて、しかも一分の解なからん人々は、彼等の大聖には百千億倍  
 のまさりなりと申す經文なり。彼の人々は、或は彼の經々にしばらく人を入れて法華經  
 へうつさんがためなる人もあり。或は彼の經に著をなして法華經へ入らぬ人もあり。或  
 は彼の經々に留逗のみならず、彼の經々を深く執するゆへに、法華經を彼の經に劣る  
 という人もあり。されば今法華經の行者は心うつべし。「譬えば一切の川流江河の諸水の  
 中に海これ第一なるがごとく、法華經を持つ者もまたかくのごとし」。また「衆星の  
 中に月天子最もこれ第一なるがごとく、法華經を持つ者もまたかくのごとし」等と御心  
 えあるべし。当世日本国の智人等は衆星のごとし、日蓮は満月のごとし。  
 問うて云く、古へかくのごとくいえる人ありや。

答えて云く、伝教大師の云く、「まさに知るべし、他宗所依の經はいまだ最もこれ第一  
 ならず。そのよく經を持つ者もまたいまだ第一ならず。天台法華宗は所持の經最もこれ

第一なるが故に、よく法華を持つ者もまた衆生しゅじやうの中の第一なり。すでに仏説よに拠る、あ  
 に自歎じたんならんや」等と云云。それ麒麟きりんの尾につけるだに（蛇）の一日に千里を飛ぶとい  
 ゐ、輪王りんおうに随れつへる劣夫れつぷの須臾しゆゆに四天下をめぐるといふをば難しやべしや、疑ぎふべしや。「あ  
 に自歎じたんならんや」の釈きもは肝きもにめひずるか。もししからは、法華經を經のごとくに持つ人  
 は梵王ぼんのうにもすぐれ、帝釈たいしやくにもこえたり。修羅しゆらを随しゆらへば須弥山しゆみせんをもにないぬべし。竜を  
 せめつかわば大海をもくみほしぬべし。伝教大師云く、「讚ほむる者は福を安明あんみやうに積み、謗そし  
 る者は罪を無間むけんに開く」等と云云。法華經に云く、「經を讀誦し書持することあらん者  
 を見て、輕賤きやうせんぞうしつ憎嫉けつこんして結恨いたを懷いだかん。乃至、その人命みやうじゆう終あびごくして阿鼻獄いに入らん」等  
 と云云。教主釈尊の金言きんげんまことならば、多宝仏の証明しやうみやうたがわずば、十方の諸仏ぜつの舌  
 相そつ一定いちじやうならば、今日本國の一切衆生しゆじやうむけんじこく無間地獄おに墮おちん事疑しやうべしや。法華經の八の  
 卷に云く、「もし後の世のちにおいて、この經典を受持し讀誦せん者は、乃至、所願しよがんむな虚なしか  
 らず、また現世げんせにおいてその福報ふくほうを得ん」。また云く、「もしこれを供養し讚歎するこ

とあらん者は、まさに今世こんぜにおいて現の果報げん かほうを得ん」等と云云。この二つの文の中に  
 「亦やく於現世得其福報」の八字、「当於今世得現果報」の八字、已上十六字の文むなし  
 くして、日蓮今生こんじょうに大果報なくば、如来の金言きんげんは提婆だいばが虚言こげんに同く、多宝の証明しやうみよう  
 は俱伽利くぎやりが妄語もうごに異ならじ。一切衆生も阿鼻地獄おに墮おつべからず。三世の諸仏もましま  
 さざるか。されば我が弟子等、心みに法華經のごとく身命しんみようもをしまし修行して、この度たび  
 仏法を心みよ、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。  
 そもそもこの法華經の文に、「我身命われしんみよを愛せず、ただ無上道を惜む」。涅槃經に云く、  
 「譬おうしへば、王使おうしのよく談論して、方便たぐみに巧なる、命を他国うくに奉るに、むしろ身命うしなを喪  
 うとも、終ついに王の所説の言教ごんきやうを匿かくさざるがごとし。智者もまたしかなり。凡夫の中に  
 おいて身命を惜まず、要かならず必大乘方等、如来の秘藏、一切衆生しゆじやう皆ぶつしやう仏性せんぜつありと宣説すべ  
 し」等と云云。いかやうなる事のあるゆへに、身命をすつるまでにてあるやらん。委細  
 にうけ給はり候はん。

答へて云く、予が初心の時の存念は、伝教・弘法・慈覚・智証等の勅宣を給ふて漢土  
 にわたりし事の「我不愛身命」にあたるか。玄奘三蔵の漢土より月氏に入しに、  
 六生が間身命をほろぼしし、これらか。雪山童子の半偈のために身を投げ、薬王菩薩の  
 七万二千歳が間臂をやきし事か、なんどもをひしほどに、经文のごときんばこれらには  
 あらず。经文に「我不愛身命」と申すは、上に三類の敵人をあげて、彼等がのり、せめ、  
 刀杖に及んで身命をうばうとも、とみへたり。また涅槃經の文に「寧喪身命」等と  
 とかれて候は、次下の经文に云く、「一闍提あり。羅漢の像をなし、空処に住し、  
 方等經典を誹謗す。諸の凡夫人見已りて、皆眞の阿羅漢、これ大菩薩なりと謂わん」  
 等と云云。彼の法華經の文に第三の敵人を説きて云く、「或は阿蘭若に納衣にして空閑  
 にあつて、乃至、世に恭敬せらるること、六通の羅漢のごとくならん」等と云云。  
 般泥洹經に云く、「羅漢に似たる一闍提ありて、惡業を行ず」等と云云。これらの  
 经文は、正法の強敵と申すは、惡王・惡臣よりも、外道・魔王よりも、破戒の僧侶よ

りも、持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし。されば妙樂大師かひて云く、「第三  
 最も甚し、後後の者は転た識り難きをもつての故なり」等と云云。法華經の第五の  
 卷に云く、「この法華經は諸仏如来の秘密の藏なり。諸經の中において最もその上にあ  
 り」等と云云。この經文に「最在其上」の四字あり。さればこの經文のごときんば、  
 法華經を一切經の頂にありと申すが法華經の行者にてはあるべきか。しかるをまた国  
 に尊重せらるる人々あまたありて、法華經にまさりてをはする經々ましますと申す人にせ  
 めあひ（責合）候はん時、かの人は王臣等御歸依あり、法華經の行者は貧道なるゆへに、  
 国こそつてこれをいやしみ候はん時、不輕菩薩のごとく、賢愛論師のごとく、申しつ  
 を（強）らば身命に及ぶべし。これが第一の大事なるべしとみへて候。この事は今の日蓮  
 が身にあたれり。予が分齊として、弘法大師・慈覺大師・善無畏三藏・金剛智三藏・不  
 空三藏などを、法華經の強敵なり、經文まことならば無間地獄は疑ひなし、なんと申  
 すは、裸形にして大火に入るはやすし、須弥山を手にとてなげんはやすし、大石を負

て大海をわたらんはやすし、日本国にしてこの法門を立てんは大事なるべし云云。靈山りようぜん

浄土じょうど

の教主釈尊・宝浄世界ほうじょうせかいの多宝仏・十方分身じつぽうふんじんの諸仏・地涌千界じゆせんがいの菩薩等、梵・

釈しやく

・日月・四天等、冥みようにか加し顯けんに助け給はずば、一時一日も安穩あんのんなるべしや。